



次 目

| | | | |
|-------------------------|------------------|----------------------|----|
| 釋尊の降誕を慶讃して(其四)……………日生上人 | 心の落付どころ……………守屋貫教 | 法華經講話(第十九講)……………小林一郎 | 記事 |
| 全國遊説の記(一)……………河合陟明 | ○本部函報各地教信 | ○寄附團費誌料領收 | |

財團統一團趣意
法人統一團趣意

統一團ハ創立以來實ニ三十有餘年ヲ經過ス其間内ニ佛祖正脈ノ法統ヲ開明シ外ニ我國精神文化ノ精髓ヲ宣揚シ能ク萬代不易ノ大道ヲ擁護シ又能ク時代對應ノ教化ヲ旺盛ナラシメ以テ文化ノ向上發展ニ貢獻セリ此ノ光輝アル歴史ハ決シテ他ノ追隨ヲ許サザル所ナリ

統一團ハ本團自身ノ活躍ノ外本團ガ母體トナリテ幾多ノ子會ト事業トヲ產出セリ其ノ首ナル者ニ就テ見ルモ天晴會アリ地明會アリ講妙會アリ自慶會アリ又知法思國會等アリ其街頭宣傳ノ如キ炎々タル道念ヲ喚起シ多大ナル感動ヲ與ヘタルヲ見ン 又著述出版ニ於テハ大藏經要義 法華經要義 日蓮主義精要 聖語錄等著書ノ量ハ實ニ等身ニ超エ雜誌トシテハ毎月統一ト教トヲ發行シ來レリ

統一團ハ過去ニ於テ如斯多大ナル法動

ヲ有スル名譽アル正定聚ナルガ創立者本多日生上人遷化後其遺命ヲ遵守シ進ンデ法人組織トナシ新ニ本部ヲ建設シ將來ニ向フテ重大ナル任務ヲ敢行セント欲ス 其中心ノ事業ヲ舉グレバ

第一佛祖正脈ノ法統ヲ擁護スル事 第二我國精神文化ノ精髓ヲ體系的ニ發揮スル事 第三此ニ適當スル學風ヲ振起スル事 第四時代對應ノ教化ヲ研討シテ之ヲ實行スル事 第五小ニシテハ日蓮門下ノ爲メ大ニシテハ我國文教ノ爲ニ毎ニ覺醒ヲ促シツ、嚴然トシテ統一ノ學風ト教化トヲ守持スル事はレナリ教旨ノ正明 研學ノ調達 活動ノ旺盛 此等ハ統一團ノ標語ナリ

定ニ佛祖ノ法統ヲ擁護シ我國ノ精神文化ヲ開明シ此ニ適スル教學ノ特色ヲ永久ニ持續セントスル本團事業ノ翼賛ハ最モ根本的ノ大善事ナルベシ 希クハ同感ノ士女奮ツテ贊同アラン事ヲ爲法爲國爲一切衆生切ニ懇望スル所ナリ

本團略則

- ◎目的 本團ハ日蓮教學ノ心髓ヲ講明シテ佛祖正脈ノ法統ヲ擁護シ我國精神文化ノ精髓ヲ發揮シテ國民精神ノ根柢ヲ培養シ立正安國ノ大義ヲ宣揚シテ以テ理想ノ文明ヲ建設スベク街頭布教並ニ教化講演會ヲ開催シ又月刊雜誌「統一」ヲ發行ス
- ◎維持員 本團ノ事業ヲ翼賛シ一時金五百圓以上又ハ毎年金拾圓以上ヲ寄附セラル、方テ維持員トス
- ◎贊助員 一時金百圓以上又ハ毎年金五百圓以上ヲ寄附セラル、方テ贊助員トス
- ◎正團員 一時金拾圓以上又ハ毎年金貳圓五拾錢ヲ贈出セラル、方テ正團員トス
- ◎入團 御希望ノ方ハ宿所氏名ヲ明記シ適當セル金額ヲ添附セラルレバ本誌ヲ無料ニテ頒布シ團章壹個ヲ贈呈ス
- ◎結友 統一誌ヲ購讀スル方ヲ結友トス

釋尊の降誕を慶讚して (其四)

日生上人

華嚴經の讚佛 (承前)

(口) 思惟慶悅

同じ世主妙嚴品の次の所に

「彼に於て思惟せば慶悅を生ぜん」

と説かれて居る、これもやはり讚佛偈であるが、「彼」といふのはお釋迦様の事を申すのである、斯ういふ場合に於ては彼といふ語を使つて少しも失禮でも何でもない。愚かな者は、日蓮聖人の事を彼と言つたのが怪しからぬなどと言ふ者があるけれども、それは文章の表し方に於ては、佛様の事に就ても彼といふ語を使うて何も差支ない、お經などは皆さういふ風に説いてある。彼に於て、即ち今のお釋迦様の有難い事を話したそのお釋迦様の事を思惟すると言つて考へるのである、お釋迦様はどういふお方であるかといふことを心に能く考へて見れば、自然に悦びの心が満ち／＼て來る、たゞ無暗矢面に喜べ／＼

と言つて責めても少しも嬉しくないといふのは信心が足らないのである。そんな事で嬉しい事が出て来るものではない。どうしたら信仰が即ち歡喜となるかと言へば、お釋迦様の事を考へるから、お釋迦様の大悲大悲はすべての者が見捨てた場合でも吾等を見捨て給ふものではない、どうぞして救つてやらうといふ熱切なる御慈悲は、寝ても醒めても我が上に被さつて居るものである。さうして斯ういふ教をお與へ下さつたといふやうにお釋迦様の事を本當に考へて見れば、「ア、實に有難い、洵に親よりも優しい女房よりも尙且つ有難い方だな」といふことになる、そこに即ち感激が生じてその歡喜を本當に鍛へ上げなければならぬ。日蓮聖人が法華經を信するといふのも、それはお釋迦様に對して戀慕をして居るのであつた、ちやうど愛人を思ふが如くに、日蓮聖人は何か事があれば釋尊の事を言ふのである、それが法華經の信解である。基督教でもさうである、基督教を信じて居る人は何か言つたならば直ぐ神様を言ふといふことに依つて、彼等の心は導かれて居る。法華經の經文を見ても持持品といふ所に、法華行者の迫害に遭ふ場合の心得が説いてある、その迫害に耐へられぬやうな事になつて來れば、直ぐに佛を想ひ出してその難事を忍ぶといふことを説いてある、それはモウ阿含の初めから釋尊が何時でもその事を言はれて居る。帝釋天王は自分の部下に誡めて言ふには、汝等が強敵と戰つて恐怖を懐いたならば、俺が山の上に法幢といふ幢を立て、置くからその法幢を見よ、法幢のある所、我在り、恐るゝに足らぬと考へよといふことを言つて居る。併し釋尊は、我は法幢は立てない、帝釋天王が部下に令するが

如く、法幢を立て、この幢を見よとは言はない、佛身は到る處にある、如何なる所でも威嚴直に起るか、何處で戰つて居る時分でも、汝等の頭の上に釋尊は常に在ると考へて奮闘せよといふことを何時も説かれて居る。だから日蓮聖人が龍の口で頭斬られる時になつたならば、「慈父大覺世尊代らせ給ひしか、それは即ち釋尊がそこに在りて居るから、お釋迦様の幢が何處にあるかと言つて見廻すのではない、南無妙法蓮華經の幢を探すのではない、目を瞑つて『大覺世尊代らせ給ひしか』と言ふ所が佛教徒の信仰の心得である。

左様にしてこの釋尊の事を考へれば歡喜の心が湧いて來るやうに訓練しなければならぬ。だから御遺文の中にも、佛を信する、法華經を信するといふことは、ちやうど女の人が戀しき人を見たが如く思ふ事であると仰しやつて居る、お經にも「咸皆懷戀慕」と言ひ「戀慕渴仰の心を生じて」と言つて、どうぞ會ひたい、見たいとその人の事を考へれば嬉しくなる、その渴仰戀慕の心を以て佛に向つて行かなければならぬ。だから法華經を信じ始めた時にはお釋迦様と自分と別であるけれども、信心がだん／＼進んで來れば、お釋迦様は自分の心の中を宿としてそこに何時でもお在りなされる、南無妙法蓮華經と唱へれば直ぐにお釋迦様がバツと眼醒めて自分の心の中に湧いて出るといふことを説かれて居るのである。お題目を幾ら熱心に唱へても、お釋迦様がだん／＼遠方に行つてしまふ、偶には見えるけれども、「遙見其父」と言つて遙にその父を見るといふのでは未だ佛教に來らない、門の外に於てこれを見るの

である。

(一) 神 變 無 量

又次に

「如來の神變は無量の門あり 一念に一切處を現じ 降神成道は大方便なり」

と説いてありますが、お釋迦様といふものは一念の中に全世界を一遍に包んでしまふ位の力があるものである、何處に生れようとも自由自在の強大なる力がある。これは今のラヂオなどといふものに就て考へれば、今此處で話をして居るのを大阪で聞いても、熊本で聴いても同じやうに一遍に聞える、その如くに佛の神通力は一念に一切處を現する。人間でさへもラヂオの設備をしたならば、此處にマイクロホンを据つけてそれを中央放送局で中継したならば、どれ程遠方でも、例へば上海でも亞米利加でも今この私の演説が聞える筈である、さういふ日も遠からず出現するであらうが、お釋迦様はそれどころではない、一念に一切法界に向つてその身を現じ、その音聲を發するくらゐの力を有つて居る。併しその中から特別に娑婆世界を救ふが爲に降神成道と言つて、迦毘羅衛城に神を降して悉達太子となり、さうして出家成道を遂げて八相の化儀を示すといふことは、大方便だと言つて居る。娑婆世界の人間を救ふべき手段としてどうしてもこの方法を採らなければならぬ。たゞ雲の中に居つて「佛は何處でも見て居る」

であつて、お父さんは向ふに居られる譯である。それが近くといふことが大事な事であるから、即ち我が頭に在ませりといふが如きは、近いて居るところではない、一體になつて自分の上に佛様がお在でなると感ずる、それが宗教の妙處である。だから宗教は抱擁するとも言ふ、男女相抱き合ふやうに身が一つになる、本當に自分の上に佛がお在でなされて、自分の信仰の中に佛在ませりといふことになつて始めて歡喜の心が湧いて来る。そこで何ものも怖いものが無くなつてしまふのである、最後は信心一つあれば宜いのである、餘のものは皆奪はれてしまふ、子供も女房も家も財産も皆奪はれてしまふ。たゞ奪はれないものは我が一心に渴仰する釋迦如來のみ、このお方と一緒に往くならば到る處怖いものは無い無論佛様に成れるけれども、成り損つて閻魔様の所に行つても、お釋迦様と一緒に往くならば到る處怖いものは無いを脱いでお出迎へをするといふことになるから恐るゝに足らぬといふことを日蓮聖人も御遺文の中に言はれて居る。釋尊と共に行きさへしたならば天下恐るべきものは無い、そこに宗教の極致があるのである。ところが吾々は兎角釋尊を離れたがるからして、離れないやうに訓練するので、そこに朝夕勤行をしたりお題目を唱へたりする必要が起る。南無妙法蓮華經と言つたら、そこに釋尊と結合するのでなければならぬ、幾ら唱へても聲ばかり大きくてお釋迦様は遠い所に行つて居る、甚しきは誰に向つて叫び居るのやらわからぬ、空家に向つて大きな聲で怒鳴つて居るやうなものである、洵にさういふ點は「彼を思惟せば慶悅の心を生ず」と華嚴經で言うて居る事でも法華宗の人々は知らないやうになつて居るのである。

といふのでは救はれないから、身を現じ法を説き、さうして人間に近づいてこれをお救ひ下される、この降神成道は吾等人間に取つてはその繋りの點に於て最も有難い事ナンである。釋迦如來の出現といふことがなければ、如何に宇宙に遍滿してどれ程尊い方がござつても、吾々はそれに繋りを取ることが出来なかつたであらう、釋尊の出現あつて成道説法を示された爲に、吾々は佛法を信解することが出来たのである。そこで「降神成道は大方便なり」と言つて華嚴經に於ては釋尊を尊敬して居るのである、法華宗の信者がさういふ所も確かりした考を有たす、降誕會も營まなければ涅槃會も營まないやうになつて居る。三百六十五日法華宗のお寺にもせよ、檀家にもせよ、釋尊に對して何を爲して居るか、一日だも釋尊の御恩報じの爲に營むといふことはないであらう、お彼岸だとかお盆だとか、お會式だとか言つて騒ぐけれども、釋尊の御涅槃に對する報恩の法要とか、或は御降誕會の法要を營むといふことは殆ど無い、これは非常な間違つた事である。法華宗である以上は何を措いても釋尊の降誕の日には集つてその降誕を感謝しなければならぬ。基督教信者であつたならば、クリスマスといふものは實にえらい騒ぎをして居るのである。日本にはまだ基督教徒は少し、か無いけれども、それでもクリスマスと言つたら廣く世間の人も知つて居るくらゐに盛んな儀式を行つて居る。日本はまだ一佛敎國である、全國に十何萬といふ寺院があり、殆ど全部が佛敎徒であると言つても差支ない、然るにその國民が釋尊の降誕の日に際してもボカンとして居る、御降誕會の日に商賣でも休んで居るといふやうな家は無いであらう、ものになつてしまふ、何の爲に日蓮門下であると言つて威張つて居るか、空威張りではないか。

この事は是非とも社會に率先して日蓮主義者が導かなければならぬ、我國の風敎確立の運動に又御皇室に對して佛敎の信仰を復活せられるに就ても、日蓮門下が率先して起たなければならぬ。さうしてそれには釋尊中心の佛敎で宜しいのである、宗旨の區別などといふものは小さい問題で、もどく釋尊の立てられた佛敎である、お釋迦様は實に尊い方だといふことを以て行きさへすれば、それでわかつた事ナンである。是非とも日蓮門下が今日のやうなくだらない考から脱却して、本當の佛敎興隆の大任を提げて奮起しなければならぬと思ふのである。

(三) 佛 慈 廣 大

又申して居るには

「世間所有の廣大の慈も 如來の一毫の分に及ばず 佛慈は空の如く盡すべからず」

といふことがある。「世間所有の廣大の慈」といふのは、世の中のありとしあらゆる様々なる親切、或は親が子を愛するとか、友達が親切にして呉れるとかいふやうな慈悲といふものは世の中に澤山ある、それを皆集めても釋迦如來の有つてござる慈悲の一分にも及ばない、佛様の慈悲は大虚空の如く一切の物を包んで居るといふことを讀佛偈に申述べて居るのである。それはあまり大き過ぎるではないかと言ふ人があるかも知れぬけれども、決してさうではない、人間の親が子を可愛がるとか友達を愛するとかいふのはホンの表面だけしか可愛がられないものである、本當にその子供なり友人なりの行末に就て、永遠の生命から根本を救ふ力といふものを有たない。マア、寒い時分に着物を買つてやるとか、腹がへつたら飯を食はせるとか、友達が牡丹餅を替るとかいふくらゐの事で、親切と言つて見たところ、それも一時、これも一時で済んでしまふ。親切な話をして呉れたと言つても、それはたゞ一時の解脱である、永遠の解脱、無限の向上を與へる 眞の廣大無邊なる慈悲といふものは、大聖釋尊に依つてのみ與へられるものである。それ故に世間のあらゆる慈悲は如來の慈悲に比べたならば毛筋ほどにも及ばぬと申して居る。左様に佛様の慈悲に對する感激を述べて居るのである。

又言ふには

「世間の業性は不思議なり 佛は群迷の爲に悉く開示す

巧みに説く因縁眞實の理と 一切衆生差別の業とを

業性の因縁は不可思議なるも 佛は世間の爲に皆演説す

この意味合は實に宜しいものと思ふ、世間の業性と云つて、人間が悪業煩惱を以て様々な罪をつくる、さうしてその苦しむ有様といふものはなか／＼一通りのものではない、吾々自分に就いて考へても業性煩惱の恐るべき事は歴々としてわかるが、まだ吾々よりも激しい人間が世の中には澤山ある譯である、さうしてその悪業煩惱の爲にいろ／＼な事をやつて居る。然るに佛はさういふ大勢の迷へる者の結んで解けざる麻の糸のやうな有様になつて居る業煩惱を解いてやつて、それに信仰を與へ解脱を與へて下される、その御親切、その御智慧といふものは實に廣大無邊なものである。この世間の業性不思議なるも如來 悉くこれを濟度し給ふといふことがこれ亦佛教の特色である、到抵儒教の聖賢の教などを以ては濟度し得られない。例へば茲に一人の極く性の悪いお婆さんがあるとする、この業つく婆さんといふものはなか／＼手強い者であつて、それは論語を持つて來ても、大學中庸を持つて來ても救ふことは出来ない、救へると思ふならやつて御覽なさい、到底いけるものではない、「お婆さん、學んで時に之を習ふ、亦説ばしからずやといふことが論語にありますよ」「何が説ばしいか、そんな事はわからぬ」……到抵受付けるものではない。それは性の悪い婆さんばかりではない、茲に面白い一つの事實がある、今は熱心な信者になつて居る和泉よしといふ婦人がある、なか／＼感心な人であつて、儒教の方は六年も先生を取つて、始終論語、孟子などの講義を聴いて居つたさうである、その間に一人しかない娘を喪つた、而

も十七か八になつてその娘が死んだ、その爲に非常に悲哀の心に鎖されて、それから先生の所に行つて、何とかしてその悲哀の心を慰めて貰はうと思つた、ところが論語を聴いても孟子を聴いても、どれを引續返して見ても、娘が死んで悲しいといふことを慰安する語は出て来ない、論語や中庸の中に於て、一人の娘が死んだ、その悲哀に閉じられて居る悲觀の精神を慰めることは出来なかつた。そこでその時には随分自棄の精神が起つたと自ら言つて居る、同じぐらゐの年頃の娘を見ると、あの娘も死ねば宜いと思つた、「自分の娘が死ぬくらゐならば他所の娘も皆んな死んでしまへば宜い、どうして自分の娘ばかり死んだか」と思つたといふ、それは本當に一時はさういふ考が浮んだと自ら告白して居つた。さういふ譯で聖賢の學に依つて自分の精神の慰安を得ようとしたけれども遂に得られなかつた。偶然の事で佛教の信仰の方に來つて統一開の講話をお聴きするやうになつてから、その悲哀の精神が慰められて、今日では立派な精神に歸ることが出来たと思ひますと語つて居る。これ等の事實に依つて考へても、聖賢の學といふものは到抵人生のさういふ出来事を教ふ力がありませぬといふことをハッキリ其の婦人は言つて居つた。それが本當の事だと私も思ふ。今この華嚴經の經文の意味もそれを言ふのである、なか／＼世間の業性は不思議なもので、孔子や孟子の説いた論語や孟子を以ては人生を本當に教ふことは出来ないものである。それを釋迦如來が能く詳述をお教ひ下されるといふことに感謝して居る。

この點が又佛教徒の忘るべからざる事である、基督が生れたとか、孔子が生れたとか、カントが生れたとかいふ事を以て偉人が生れたといふのは、それはまだ世間の淺薄なる者が言ふ事である。古往今來世界に偉人は多しと雖も、本當に人生の人の心の奥を教ふ眞の救世主は大聖釋迦牟尼世尊たゞ一人である、「唯我一人能爲救護」と法華經に説き給ひし事、我を欺かざるものである。そこで斯く信することにして法華の信者である。その考がグラ／＼して居つては「唯我一人能く救ひ護ることを爲す」とあつても、唯我一人とは誰の事であるかわからない、「鬼子母神様でございませうか」などといふことになつては話にならない譯であります。(次續)



心の落付どころ

一一一

守屋貫教

一、人生と苦惱

生活苦といふ問題が、生活者に依つて長い間叫ばれたが、この頃はその聲が小さくなつたやうに思へる。それは決して生活苦が解決されたからでない、寧ろ生活苦は以前よりも一層深刻になつたかも知れない、唯生活苦になれたが爲めに人々は口に生活苦を訴へないまでであらう。それで私は考へる、現代人は老若男女なく、男となく女となく、富貴となく貧賤となく、有ゆる人々が生活苦を體驗して、佛敎の經典に説かれた「三界は火宅の如し、衆苦充滿して甚だ怖畏すべし」といふことを、つくづくと

味つたであらう。總じて人生は苦の娑婆であること
を思ひ知つたであらう。

うち見た所人々は嬉しさうな顔をして居るけれども、家庭に職場にそれ／＼希望を以て働いて居るやうに見えるけれども、立入つて見るとな／＼さうでない。彼等の凡てはそれ／＼苦の擔當者である。こんな話がある。世の中の人々はみんな苦惱んで居る。そして自分は苦しい他人は幸福であらうと思つて居る。さうした苦惱を懷いて居る人々を見そなはした神様は、一つの命令を出された。「みんなそんなに苦しいとなげくならば、そして他人を羨むならば、銘々の苦を袋に入れて佛の處へ持つて來るがよい。」

それを聞くと人々は喜んで直様神の命令通りに、銘銘の苦を袋に負つて神様の處に行つた。人々の苦を入れた袋が集まると、神様は更に命令を下された。「御前方はこの山と積み上げた苦の袋をどれでもよいから選んで持つて行くがよい。」そこで人々は我勝ちにその好む所に従つてよささうなものを擔いで家路に歸つた。さて袋を置いて人の苦を吾身につけて見ると、どうも具合がよくない、毎日その事をなげいて、結局本来自分の持つて居つた苦が一番應はしいことが分つた。そこで神様は三度命令を出して、人々に苦の袋を持來さしめ、本の自分の苦の袋と交換するやうに取りはかられたといふ。

これは有名な話であるが、この話の示すが如く、人々はみんな苦を持つて居る、そして他人の幸福を羨んで居る。然しながら結局彼等は自分の苦を擔ふ事に満足せねばならぬであらう。それが苦の人生の姿である。

二、眞剣な生活

この物語は何か抽象的な物語のやうに聞えるが、事實はどうしてなか／＼さうでない。私共は兄弟同志親類同志でさへ、御互に楽しみ合ふといふよりは寧ろ苦しみあつて居る。調子のよい時はさうでもないが、一旦調子が狂ふと人間は仕方がないのである、相怒み相争うて終止する所を知らない。親類同志さへさうである、況して他人同志世間社會などいふものは昔から苦の娑婆と云うて來た通りである。かうした苦の人生に處しては、結局位置名譽財産などは安心を將來しない。心の落付どころを定めるのでなければ苦の人生を突破することは出来ない。

人間の一生を考へて觀ると、第一、幼年から青年時代へかけては、親や教師の命令下に素直に育つて行く時代、わが身の思想生活が親の保護の下に

一一三

時代若くは支へられて居る時代である。この時代にはいはゞ温室にある花のやうなもので、何の苦もなくのび／＼と成長して行く。第二は世界に事を爲さんとする時代、此時代には世界と戦つて自己の名譽位置財産を獲得せんとする事から、苦の世界へと落ちて行くことゝなる、佛者の所謂煩惱五欲の囚はれの身となるのである。幼年時代のやうな親の支援を失つて、獨立してもがくのであるが、餘りに世間の事に貪著し屈托するものから、神も佛も認識することなしに過ぎてしまふ人が多い。第三は漸く老境に入つた時代で、體力も衰へ精神の力は盛になる、そして何處に歸着すべきかを決定すべき時代であるが、何れ壯年時代の貪著や屈托の爲めに、最早日暮れて道遠しの感がないではない。

かうした人間の一生が多くの人々の常であるとする、さうして私共は多忙の世の中に唯動搖不安で暮して行くに過ぎないとすると、私共は一つ發憤し

私共も大悟徹底はせずとも、少なくとも修養時代に充分な覺悟を造り上げて、迷なく苦なく世の中に働きたいものである。それもかなはなければ、自分の與へられた職業自分の與へられた仕事を、至誠にして眞剣に従事するやうにしたい。自分の仕事をわき目もふらず眞剣にやるならば、次第に心は落付くであらう、世界が如何に苦しくとも坦々としてその間を歩くことが出来るであらう。私共は必ずしも過去の跡をくゞせず、また徒に未來に望をかけず、現在目の前の生活、目の前の仕事をば、わき目ふらずに、眞心を以て陰日向なく眞剣に仕終せるならば、私共の心は其處に落着くであらう。唯苦しみ惱んで居つても仕方がない、それ等に貪著なく足元から奮ひ起つて、眞剣な生活を建て直すがい。御互の日々の生命である仕事を一生懸命にするがよい。そこに私共の心は自然に落付くであらう。

考へなければならぬ。佛敎界の偉人釋尊とか日蓮聖人とかいふ方は、佛敎信者の間に祭り上げられて居るが、それは釋尊や日蓮聖人の本意ではなかつた。一切の人々の御手本となりこれを指導することであつた。釋尊にして見れば、廿九歳のとき出家、苦行六年の後大悟徹底せずんば再びこの座を起たすの大決心を以て終に涅槃の境界に達せられ、爾來五十年の間一身を粉にして東西南北に傳道をせられた。日蓮聖人にして見れば、十二歳のときから卅二歳のとき迄心血を凝いで苦修練行、それから廿餘年の生涯は、全く法華經の行者としての大難四度小難數を知らずといふ奮闘の生涯であつた。かうした聖者の御手本を見ると、その修養時代には爲すべきことは凡て爲して所謂大悟徹底してかゝつたのであるから、苦の娑婆に出で如何に奮闘しても何等煩はされることはない。その行動の自由自在なること、風の空中に於て一切障礙なきが如くであつた。

三、慈愛の生活

至誠を以て御互の生活を営むならば、眞剣に日々の仕事を營むならば、苦しい世界にあつても心は自然に落付くであらう。さりながらそれは究極の落付ではない、自分だけは或は落付けるかも知れない。衆と共に世界と共に落付くことが出来ない。善人だから稱讃する、悪人だから非難する、それは一應よろしい。賢人だから近づける、愚人だから遠ざける、それも一應はよろしからう。然しながら私共が善人と賢人とをほめ、悪人と愚人とを非難するだけでは、結局私共の心は落付かない、私共は世界に生活してそれ等の人々に日々相接しては心がかき亂される、惱まされる。善人は無論の事悪人も親むのでなければ、賢人は勿論愚人でもいつくしむのでなければ、私共の心は終に落付く事は出来ない。母親が幾人かの子供に對するやうに、その子

等の賢愚善惡に何等差別を立てない、寧ろ愚かしき子、惡なる子の上にくそ母親の慈愛が濺がれる。さうした慈愛に母の心は安住して居る、子故の慈愛の爲めならば彼女は老の來るをも辭せない、命をも捨て、顧みない。それと同じく私共は世界に住んで、世界の人々に慈愛の心をかけその慈愛で世界を包む心を起こすのでなければ所謂恩親平等の心を持つのでなければ、結局おちつきを得ることは出来ない。勿論私共は思想や學問によつて、さういふ境界に到達しようとは思はない。私共は世界の一切を包容して尙餘す所なき佛を信することに依つて、さうした慈愛の生活を營むことが出来る。信仰生活とは私共の日常の生活を堅固にするばかりでなく、また私共の生活を慈愛に充ちたものにするのである。信仰生活をするものは、世の中の人々に接して、漸くに愚人とか賢人とか悪人とか善人とかの差別は消えて唯その人々の中に佛を見るであらう。人々の中に佛

を見れば、これに過ぎたる和ぎの生活はない。自分が敢て大きな慈悲者でなくとも、信仰生活の中私共は日々慈愛を増大することが出来る。そして慈愛が増せば増す程私共の心は益々落付を得ることが出来る。それが爲めに私共は佛なる靈界と日夜に心が通はなければならぬ、靈の世界に心が落付いて初めて私共は、この世界にあつて安心立命の生活を樹立することが出来る。

佛 弟子に告げたまはく、一切の凡夫は衣食臥具に著し、身の爲にし、心に樂む。菩薩は若し衣を須ふる時は身の爲にせずして但法の爲にす、故に憍慢せず常に卑下し、佛の爲にせず差駁の爲にし、諸の衆生惡風等を障ふ爲にす。食に於ても同じく心に貪著することなく、皆衣に於けると同じきなり。

一 涅槃經

法華經講話

(第十九講)

妙法蓮華經方便品第二 (其三)

前講には、方便品の初めのところで、釋尊が、佛の智慧といふものは非常にすぐれたものであるといふことをお説きになつたところを讀んで居りました。今日はそれに續いて偈に入つて、更にその意味を重ねて説かれるわけであります。

爾の時に世尊重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を説きて言はく、

世尊は量るべからず 諸天及び世人
一切衆生の類 能く佛を知る者無し

(爾時世尊、欲し重宣此義、而説偈言。世尊不可量、諸天及世人、一切衆生類、無能知佛者。)

小林 一郎

「世尊」といふのは世の中で一番すぐれたものといふ意味、即ち佛様であります。その佛がどれ程智慧を有つて、どれ程の大きな慈悲心を持つて居らつしやるかといふことは、他の者がこれを推量して見ても、推量の出来ないことである。いろいろの天上界のもの或は人間界のもの、その他一切衆生の類すべて命の有るものが皆集まつて考へて見ても、よく佛を知る者は無い。これはその譯です。上の方から下の方を見下してみれば能くわかりますが、下から上を見上げるといふことになれば、あまり高い所はわからない。佛様の方から見れば一切の事がわかる

でありませうけれども、他の者は佛様のことはわかない。これは無理のないことであります。

佛の力無所畏 解脱の三昧

及び佛の諸餘の法は 能く測量する者無し

(佛力無所畏 解脱諸三昧 及佛諸餘法 無能測量者)

佛の力とか、無所畏とか、解脱とか、三昧といふことは、前にありましたから説明を略しますが、佛様の揃へて居らつしやるいろ／＼なお力、或は智慧、「佛の諸餘の法」といふのは、今、力とか無所畏といふ二つ三つを算へ上げたから、その他の佛様の具へて居らつしやる一切のはたらしといふものは、誰も推し量る者は無い。

諸餘の法とあります、この「法」といふ字は大變面白いのであります、前にも申しましたやうに、法といふことには凡そ三つの意味がある。普通は法度、法則の意味、モウ一つは教法の意味、いま一つは真理とか實在とかいふ意味がある。普通は人を教

へるには、お前は斯ういふ事をしろ、斯ういふ事をしてはならない。斯うやれば世の中は善く行く、斯うすれば世間が亂れるぞといふやうに説く。それが法度、法則であります。倫理とか道徳とか、普通の世間の法律規則といふやうなものは、その意味での法であります。所がさういふ、して善い事、して悪い事をさめるのは何に依つてさめるかと言へば、それは人間を本當に人間らしく生きさせる爲にきめるのでありますから、法度法則の根本を成すものは、教法であつて、人の人たることを本當に教へるもの、それが本にならなければならぬ。だから法といふものを教法と解釋すれば、前の法度法則といふよりは意味が深くなる。然るにその教法といふものを何故意味が深くなる。然るにその教法といふものが説かれるかと言へば、聖人、賢人、或は佛といふものが説かれるかと言へば、それは聖人や賢人や佛様が勝手にさめられるのではなくして、それは人間の本性に基いて説かれる。吾人人間が天地の間に、天地と共に生きて居るのであります。

そこで今「佛の諸餘の法」と言へば、佛様の覺つて居らつしやる覺りといふ意味にもなるし、或は又佛の教をお説きになる説き方といふ意味にもなる。兩方が法といふ一語の中に入つて居る。だから斯ういふ言葉は西洋の言葉などに譯せない。佛教を西洋のものに譯して見ると、そんな三つの意味を含んだ法といふやうな字は、英語にも獨逸語にもありはしませんから困つてしまふ。仕方がないので「法則」といふやうな意味に譯して居るやうでありますけれども、さういふ譯では意味は無論盡されない譯であります。

佛の具へて居らつしやる諸餘の法、即ち力、無所畏といふことはかりでなく、一切の佛の具へて居ら

りますから、人間を包容するところの大きな自然の根本の法則に基いて教が立てられるのだ。斯ういふことになる、その教の本と成るものは、絶對の真理であるとか、或は實在、永久に變らない人間の本當の存在の意義を捉へて、それから教が立てられるのだといふ意味になる譯であります。「法」といふことはこの三つの意味になる。だから私共が法に歸依するとか、法を重んずるとかいふことは、どの意味で言ふか、それは場合に依つて違ふ。極く淺く言へば、法を守れとか、法に反いた者は罰を與へるといふ時には、第一の法度、法則の意味である。それからこの法を重んじて一生涯守らうといふやうな意味では、第二の教法といふ意味になる。法は千萬年を通じて天地と共に變らぬといふ場合には、第三の絶對の真理といふ意味で言つて居る。さういふ風に同じ法と言つても、意味の淺い深いがある譯であります。併し要するにそれは通じて一つのものでせう。

つしやるお力、或は佛の覺つて居らつしやる覺りの内容といふものは、佛でない者が、斯うだらう、あまたらうといつて推量した所が、逆も推量の出来るものではない。

本無數の佛に従ひて 具足して諸道を行じたま

へり

甚深微妙の法は 見難く了す可きこと難し

無量億劫に於て 此の諸道を行じ已りて

道場にして果を成ずることを得て

我已に悉く知見せり

(本從無數佛一 具足行諸道一 甚深微妙法 難見難了 於無量億劫一 行此諸道一已 道場得成) 成り果 我已悉知見)

然らば佛様はどうしてさういふ不思議な、普通の人間のわからないやうな所までも知るやうにお成りになつたかと言へば、それほど佛様でも、初めから佛ではないのであつて、お釋迦様ならお釋迦様とい

ふ一人の佛様を考へて見ても、それは數限り無い佛様に仕へて、教を受けて、さうして完全無缺に具足していろ／＼な道を實行されたのである。それだから甚だ意味の深い、到抵説かうとして説けないやうな法、マア普通の人間には逆も見ることが出来ず、了解することも出来ないやうなものだけれども、それは無量億劫といふ非常に永い年月の間いろ／＼な修行をした、その結果として覺り得られるのである。これは人間の命は現世だけとは思はない。お釋迦様の御一生を、現世に於ける御一生だけ考へれば、二十九で出家して、三十五で覺られた、僅に六年か七年の話であります。併ながらお釋迦様が現世に於て六年か七年の間で覺られたといふことは、吾々の眼の前に現れた事實に過ぎないのであつて、六年や七年で覺るやうな本性を有つて居らつしやるといふことは、前の世の前の命に於て様々な功德を積んで、様々な修行を積んだその結果であるといふやうに考

へられて来る。それだからお釋迦様は現世だけではないので、永い間の修行の結果といふものが、それが現世に於て斯う現れて来るのだといふ風に思はれる。これは前に申した業報の考が茲に現れて来て居ります。佛教では業と報との關係といふものを際も無く續くものと考へる。自分の爲した業がその報を生むのである。その報といふものは正報と依報に分れる。正報は自分の身心の一切のはたらき。依報は境遇でありますが、自分の今までやつたその仕業がその報を生む。その報といふものは、一つは自分がどんな身、どんな心を有つて居るかといふことは、それに積み來つた行ひに依つて決定される。又自分が如何なる境遇に生れ合せるかといふことも、これ迄爲し來つた行ひに依つて決定される。斯う考へるのであります。であるからこの業といふのは今の瞬間までの一切の業です。今の自分の身心及び境界を決定するものは、今の瞬間までに積み來

つた一切の業がこれを決定する。私が今此處に斯うして居る私の心のはたらき、私の身のはたらき、今の私の置かれた境遇は、私が此處に到着するまでの私の一切のはたらきに依つて決定されて居る。その一切のはたらきは、現世に生れて五十何年でありませんが、前の世もその前の世もありませうから、際も無い昔からの一切の私の爲したはたらきが、今の私の身と心と境遇とを決定して居る譯です。明日の朝になつて私がどんな身、どんな心持、どんな境遇に居るかといふことは、明日の朝眼の醒めるまでの、際も無い昔からの私の一切の行ひがこれを決定する。斯ういふことになつて行くでありませう。だから業と報とはズット永遠に續いて行くのである。前の業の結果が報を生んで、この報の中で何か仕事をして居るならば、その仕事の本になつて又これから後の報を生み出す譯であります。私が今までどうやら壯健な身と心を有つて斯うして法華經のお話をす

るといふことは、有難いことですが、その報を無にせずして私が一生懸命で法華經のお話をしたならば、その結果といふものは、明日の朝起きた私は、今晚の私よりは大した進歩も無いでせうが、幾らか善くなつて居るかも知れぬ。即ち今日までの私の業がその後の報を決定する。それはチョウド樹が伸びるやうなものです。私の家の庭に青桐が一本あります。それを見るたびに私はさう思ふ。青桐は大變長く伸びるもので、この五月頃から芽を出して、秋までの間にかなり伸びる。それで今年は終ひになつて、来年又そこから芽を出して伸びて行く。これを伸すものはこの幹である。幹が伸びて、伸びたものが又幹になつて、來年これを伸ばして行く。さういふやうなもので、私共のやつて居る事は、過去の業の報ひとして今のはたらきがあるのでありますが、今のはたらきが又過去のはたらきと一緒になつてその本をつくつて、そこから明日からはたらきを生み出し

て行く。斯ういふやうになるものであります。

それですからその永遠のはたらきを信じます時に今日の一日を無駄にしてはならないといふことがハッキリとわかる譯であります。この關係を淺はかに見る者は、永遠の命を考へて、寧ろ今日一日などは物の數でないといふやうに軽く見ますけれども、さうではない。今の青桐が毎年ズン／＼伸びて行くけれども、途中で暴風雨にでも遭つて倒れてしまへば、折角伸びて來たものが伸びなくなると同じやうに、今日まで善根を積んで來たものであつても、今何か間違ひがあつて途方もない事をやるならば、過去の善根といふものは頓挫するかも知れぬ。だからこの一日は決して一日ではない、永遠の命を決定する爲の今日の一日だと思つた時に、今日の一日、今の一刻といふものを、決して軽く取扱ふことは出來ない。そこは餘程考へないといけない。

今までは、主善の宗教が持たされた時代もあ

つた。これは已むを得ないでせう、封建制度であつて百姓町人はまるで虫蟻姑のやうに遇はれた、或は戦亂が続いて、いつ家が焼かれてしまふかわからない、親子、兄弟、夫婦、今朝機嫌よく顔を合せて居つても、晩になれば散り／＼になるかも知れぬといふやうな状態であれば、兎角人間が眼の前の事を厭ふやうになるから、その眼の前の事を厭ふ氣分にうまく一致する爲には、今日の一日を意義有るやうにするといふよりも、寧ろ今日の一日を軽く取扱つて、後の方に重きを置くといふ説きの方が、受けがよい譯です。皆の心にシツクリ嵌まる譯です。さういふ時代も随分ありました。マア佛教もさういふ時代に榮えたのでありませうが、どうも先の方にばかり重きを置いて、眼の前の命にあまり重きを置かないといふやうな流儀が、随分歓迎されたものです。さうして又そこに誤解もある。例へば淨土や念佛の方で言ふと、現世を軽く見る。後の世に佛に成る

ことを考へて、現世はどうでも宜いといふ風に取扱ふのだと斯う思はれて居る。實はさうではないのです。現世を軽く見るといふことは一通りの理窟であつて、現世に執着するナといふことです。現世に執着しないことになれば、お互が争ひ合ふことをやめるから結局現世が善くなる。だから現世を軽く見るといふ教は徹底的に現世を軽く見るのではなくて、本當は執着することをやめて、あの世も現世も善くしようといふのです。だから念佛だつて、日蓮宗の人などは無暗に念佛の悪口を言ひますけれども、あれはあれで又あゝいふ立場があるのであつて、要するにこれは永く續いた命であるといふことを捉へて説いて居るのであります。説き方に於ては、法華經を中心にした説きの方が勝れて居ることは申すまでもありませぬけれども、苟くも健全な宗教であれば、今日のこの日はどうでも宜いといふ宗教は無い筈です。たゞ軽く見よといふのは、執着するナとい

ふ意味です。いゝ加減にしろといふ意味ではない。何としても、今日の此の日は無意味に送るべきものではない、意味あるやうに送るべきであります。その日が積り重なつて永い間の修行になり、それが積り重なつたものゝ結果として、此の世に生れて来る場合に、初めから頭腦の良い人にも生れるのでありませうし、初めから好き境遇にも生れるのでありませう。

婆羅門の教と佛教との異ひ目はそこにあります。婆羅門の時代に於ては——悉くといふ譯ではありませんけれども、お釋迦様當時の大多數の婆羅門は、過去の業の報ひが今現れて、さうして又今の境遇で爲した業が後に及ぶといふ、その後の方をよしてしまつて、前の方ばかり見た。お前が今貧乏して居るのは過去にした事が悪いのだ、お前が今馬鹿に生れたのは前の世に罪を作つたのだ。どうも仕方がないぢやないか、あきらめてしまへ。斯う言つたもので

す。これは實を言ふと教が半分ナンです。その過去の報ひを受けた今の世に於て、馬鹿なら柄口になるやうに、心が弱ければ強くなるやうに、散亂した心ならば引締るやうに骨折れば、骨折つた報ひは後まで遺る。それを説かないで、前の報ひで今が悪いのだからあきらめろといふ側ばかり説いた。それをお釋迦様は否定して、そんな馬鹿なことがあるものかといふのが、一つはお釋迦様が新しく奮起された理由にもなる譯であります。

さういふやうに考へて行きますとこの本文はストラと解けるのであります。お釋迦様が三十幾歳で覺られたのは、現世に於ける修行は六年か七年だけけれども、これは前の世から積み重ねた善根であるのだ。お釋迦様ばかりではない、すべての佛が皆それである。無量億劫といふ非常に永い年月の間いろいろな佛に仕へて、さうして修行をした、その結果が現れて現世に於ける修行になつた。さうしてその結

果が現れたから、道場にして果を成すことを得た即ち佛陀伽耶で六年の難行苦行を終つて後に果を成するといふのは、その今までの修行の結果として所謂絶対の覺りを開くことが出来て、「我已に悉く知見せり」でスツカリ一切の理、一切の道を究め盡した、と同時に、この自分の修行は現世のみではない前の世から修行を續けて今日の覺りとなつたのだといふことも能くわかつた。けれどもさういふことは普通人間の三十年や五十年の修行ばかりを考へて居る人には解らぬ事だといふのであります。

是の如き大果報 種種の性相の義

我及び十方の佛 乃し能く是の事を知しめせり

(如是大果報 種種性相義 我及十方佛 乃能知是事)

「大果報」といふのは佛に成るといふことでありますから、これは大きな果報であります。前のところに「道場にして果を成すことを得て」とあつてこゝには「是の如き大果報」とあります、前にはた

だ「果」とあつて、後の方に「果報」とありますがこれは注意すべき事です。何故かと言ひますと、これも前に申したやうに佛教では因縁果報といふことを重んずる。因と縁と果と報で萬事が出来るのだといふ。佛に成る道に就て言へば、因といふのは自分の修行である。縁といふのは善き教によることである。果といふのは徳を成じて、自分が佛のやうな立派な徳を具へることである。報といふのは利益で、一切の人を教へ導くはたらきをするのが報です。斯ういふ風になつて、この四つの關係といふものはどうしても離れない。自分の修行が十分であつて、善き教に頼窮つて、その善き教と完全な修行の結果として非常にすぐれた徳が出来上つて、その徳を具へれば自ら利益するといつて、すべての人を教へ導いてすべての人の苦しみを除き、すべての人の迷を取去つてやるはたらきが出来るのである。これはどうしても離れない譯であります。だから自分の修行も

大事だが、善き教に値ふことも大事だといふことになる。

それならば、自分が修行をしようとしても善き教に値はなければ修行が出来ない、善き教に値ふにはどうして値ふか、値ふ人もあり、値はない人もある。どうして値ふかと言へば、この因も縁もこれは過去の業の報だといふことになる。今自分が修行するといふことも、修行の出来るやうになつたのは、今までの自分の骨折つた結果である。今善き縁があつて佛様の教に値ふことが出来たのも、それも過去の業の結果たとなりませうから、業も報も皆畢竟するに今までの自分に依つて決定されるといふことになる。併ながら人間は一緒に存在して居るもので、個人個人離れ々々で生きて居るものではありませんねから自分の過去の修行だけでは善き因と、善き縁を得られないといふやうな人に對しては、他の人が特に憐れんで善き縁を與へてやるといふことが非常に大事

人間がどんな性質を有つて居るか、どんな風になつて外に現れるかといふことは、それは皆今まで積み来たはたらきに依つてきまるのだといふ、その事です。種々の人の種々の性質、種々の人のいろ／＼外に現れる相、形の關係、それは我及び十方の佛であれば、皆さういふことを知つて居る。佛であればその事は能くわかる。お前達にはわかるまいから、佛の教に依つてそれを辨へて行くより仕方がない。

是の法は示すべからず 言辭の相寂滅せり

(是法不可示 言辭相寂滅)

斯ういふやうな一切の人間の關係といふものは「示すべからず」と言つて、言葉で一通りわからうといつてもわかるものではない。何故ならば「言辭の相寂滅せり」で、言葉で言ひ表はす方法といふものは限りがあるので、いよ／＼絶対の事を言ふときになれば、言へなくなつてしまふのです。勿論言葉といふものは決して軽いものではない、けれども言葉に

であります。それが本當の慈悲であります。その自分だけの力では善き縁の得られない人がある。さういふ人は外から縁を與へてやる必要である。ですから人間の功德といふものは、善き縁を與へるのが一番大きい功德だとも言はれるのです。因と縁と果と報といふことはさういふ關係を成して居る。自分が修行して善き縁、即ち善き教が得られれば、その結果が自分の大きな徳となりまして、それが人を利益する報となる。

茲に「大果報」とあるのはそれを言つたのです。今までいろ／＼善き教に依つて修行したその結果が果を成ずるといつて、覺りを成すことになつたのですが、その覺つたに就ては、これからその覺つた結果が大勢に及んで、一切の人を教へ導いて、一切の人を幸福にしてやることも出来るのである。さういふ大きな果と報である。

それから「種々の性相の義」といふのは、一切の依つてだん／＼と修行して行つて、結局言葉や文字で表はせない所を捉へるといふことをしなければ、たゞ言葉だけに執はれてしまつてはつまらない。ですから言葉を輕んずる人はつまらない人です、それはつまり言葉や文字に依らずして修行するナンといふ事は出来ないのですから、言葉や文字を輕んじてはいけません。しかし言葉や文字で止まつてしまふ人もつまらない。本當の覺は言葉で言へない、文字で書けない。だから言葉や文字を大事なものとしてさうしてその言葉や文字の中に深入りして、モウ言へない、書けない所まで入つて行くといふやうにしなければ、本當の修行といふものは出来ない譯です。場合に依るといふと、言葉や文字は要らない、心から心に傳はつた教が善いのだといふやうなことを言つて、經典などを輕んずるやうな人もあるやうであります。それは又愚かな話であります。傳へるものが無ければ、イキナリ傳はりにはしない。徳川幕

府の頃に、雨森芳洲といふ儒者がありました、非常に着實な學者でありましたが、或る時、弟子達が集まつて討論をして居るのを聞いて居ると、どうも訓話の學といつて文字ばかり穿鑿して居る舊い學者があつていけない、本當の聖人の教といふものは文字などでわかるものではない、心で悟るのだ、といふやうなことを頻に弟子達が議論して居る。芳洲先生は黙つてそれを聴いて居つたが「お前達はナカ／＼偉い事を言つて居るナ、文字などに執はれないで聖人の心を直に悟るといふ、それが出来れば偉いものだが、併しさうばかりはいくまい。自分が此の間歌を作つたからこれを讀んで見ろ」と言つて、次のやうな歌をナカ／＼と書いて見せた。

文字の關まだ越えやらぬ旅人の
道の奥をばいかで知るべき

「文字の關」といふのは奥州の入口にあります。文字の關を越えてから「みちのおく」即ち奥州へ入る

諸餘の衆生の類 能く得解すること有る事無し
諸の菩薩衆の 信力堅固なる者をは除く

(諸餘衆生類 無有能得解 除諸菩薩衆 信力堅固者)

それであるから「諸餘の衆生の類、能く得解すること有ること無し」で、佛様のお心持は、人間が大勢集まつて居るからといつて、すぐになか／＼覺れるものではない。「諸の菩薩衆の信力堅固なる者」をば除く」といふこの言葉が大事です。誰にもわからぬと言つて突放してしまつてはいけない、わからぬのが普通だけれども、菩薩の道を修行して居つてその信する力が非常に堅固な者だけはわかるのだ、これは特別だと言はれる。信力堅固、佛の教を深く信じてその信する心持が少しも動かぬといふやうなものであれば、それは勿論わかる。その信力堅固な者は菩薩衆でなければならぬ。菩薩は、たび／＼申すやうに佛の心持を自分の心持としようといふ決心をして

文字の關を越えないで道の奥へ行かうと言つても無理やないか。これを見せられて弟子が閉口したといふ話がある。成程言語や文字に執れたことは愚かであるかも知れない、けれども言語や文字さへわかからないものが、道の奥を捉へることが出来るものではないませぬ。物には順序がある。此處で佛様が言葉はモウ役に立たぬと仰しやつたのは、お弟子達が佛様の言葉で以て今まで着實に修行して居るから、それに對して言はれた。お前達は佛の言葉といふものを聴いて能く修行して居るけれども、本當の事になると、言葉だけではいかない、自分達でしつかり考へろといふことです。さういふのを聴いて、吾々のやうに言葉もあまりわからない者が、いきなり覺らうナンと思つたら大變間違ひであります。やはり言葉から行くが宜しい、教から行くが宜しい。さうして結局は言葉や文字に執れない所に行くのであります。

居る者、即ち自分に餘力があれば化導をお助け申して、世の中の苦しめる者、憫める者を少しでも濟けてやりたいといふ心持を有つて居る者、これが菩薩でありますから、さういふ慈悲の心持を有つて居つて信力堅固、佛の教を深く信じて居る者ならば、佛のこともわかるだらう。それでなければわからぬといふのであります。

佛教に於ては「三覺」といふことを申しまして、三つの覺をスツカリ揃へて居るのが佛様だと言ふ。三覺といふのは「自覺」と「覺他」と「覺行圓滿」といふことです、覺行圓滿といふのは、自覺と覺他を揃へて行つた結果である。自覺は自分が覺ること、覺他といふのは人を覺らせることでありすが、自分がスツカリ覺つてから後に人を覺らせるといふ意味ではない。若し自分がスツカリ覺つてから人を覺らせるといふことになれば、吾々などは何も言はないで黙つて死んで行くより仕方がない。さうではな

い、自分で覺つて『成程有難い』と思つたらその、幾分でも人に頼つてやつて、人を同じ道に導くといふことをしなければならぬ。又他の人を覺らせて同じ道に入りたいといふ熱心があつたならば、その熱心に促されて自分の覺りも幾らか進むのでありますから、自覺に依つて覺他が生れ、覺他に依つて自覺が生れる。覺つてから後にといふのではない。初めからその積りでなければいけない。自分一人偉くなつて他の者を眼の下に見下して、『彼等は俗人だ』と言つてすまして居るといふ、さういふ心持ではない。自分が少しでもわかつたら他の人を覺らしけなりたい。又他の人を教へる爲には自分が更に善くなりたといふやうに、自覺と覺他と互に原因となり結果となつて進んで行つて、その一番終りが覺行圓滿、覺つた事が行ひに現れ、形に現れた所と心に信する所とが少しも違ひがない、斯うなつて行くのであります。それですから『諸の菩薩衆』とあり

くつたといふだけではまだいけない、その迷ひの無くなつた中から、世を救ひ人を救ふやうな力が溢れ出るやうな状態にならなければいけない、たゞ清らかな心持だけでは本當ではないのであります。

假使世間に満てらん 皆舍利弗の如くにして
思を盡して共に度量すとも 佛智を測ること
能はじ

(假使滿世間 皆知舍利弗 盡思共度量 不能測佛智)

舍利弗は智慧第一と言はれて居ります。その舍利弗のやうな智慧の勝れた者が大勢集まつて、皆一緒に佛様といふものはどんな方だと思つて推量して見ても、さういふ者には佛の智慧を推し量ることは出来ない。

正使十方に満てらん 皆舍利弗の如く
及び餘の諸の弟子 亦十方の刹に満てらん
思を盡して共に度量すとも 亦復た知ること能

ます。菩薩衆といふのは、自分一人覺つてそれで宜いごさめて居るものではない。他の人をも覺らしてやりたい。他の人をも同じ道に入れてやりたいといふ慈悲心のある人、さういふ人が佛の教を信じて確りと動かないやうになつて居るならば、その人だけは特別であつて、さういふ人には佛の境界もわかつて行くだらうといふのであります。

諸佛の弟子衆の

一切の漏已に盡して

是の如き諸人等

曾て諸佛を供養し

是の最後身に住せる

其の力堪へざる所なり

(諸佛弟子衆 曾供養諸佛 一切漏已盡 住是最後身 如是諸人等 其力所不堪)

諸佛のお弟子達がいろ／＼な佛に供養して、一切の漏といふ煩惱が無くなつて、最後身といふ一番終ひの境界、即ち迷ひがスツカク無くなつて、心が清らかなになり盡した状態、さういふ人々でも、佛の事を知るにはまだ力が足りない。迷ひがスツカク無

はじ

(正使滿十方 皆知舍利弗 及餘諸弟子 亦滿十方刹 盡思共度量 亦復不能知)

又舍利弗の如き、その他のお弟子達、舍利弗以外の佛の教を修行する者が、十方の世界に一バイになるほど澤山の人間が、思ひを盡して一緒に推量して見ても、佛様の智慧はわからぬ。

辟支佛の利智にして 無漏の最後身なる

亦十方界に満ちて 其の數竹林の如くならん

斯等共に一心に 億無量劫に於て

佛の實智を思はんと欲すとも 能く少分をも知ること莫けん

(辟支佛利智 無漏最後身 亦滿十方界 其數如竹林 斯等共一心 於億無量劫 欲思佛實智 莫能知少分)

辟支佛といふのは縁覺といつて、縁に依つて覺る、自分の毎日出會ふ事柄に依つて、佛の教と思ひ合せ

て世の中の無常を覺る者でありますが、それが大變智慧が勝れて居つて、迷ひが無くなつて、世の中の人の模範となるやうな淨らかな行ひをしたものであつても、さういふ人間が十方の世界に満ちて、竹林の如くといふのは數の多いこと、數に生えて居る竹のやうに、數限りの無い大勢の者が一緒に居つて心を協せて、億無量劫といふ非常に永い年月の間、どうかして佛様の智慧はどんな智慧だか考へようとして見ても、少しでもわかりはしない。なか／＼佛の智慧といふものは深いものである。

新發意の菩薩

諸の義趣を了達し 又善く法を説かんと
稻麻竹葦の如くにして 十方の刹に充滿せん
一心に妙智を以て 恒河沙劫に於て
咸く皆共に思量すとも 佛智を知ること能はじ

(新發意菩薩 供養無數佛 了達諸義趣 又能善説法 如稻麻竹葦 充滿十方刹 一心以妙智 咸皆共思量 佛智知能 恒河沙劫 於此 亦復能知)

を起さうといふ理想を有つたらば、その信心が後へ退らない、ズツと同じ堅固な信心を持ち續けて居る人が恒河の沙の數ほどあつて、一心に共に考へて見ても、逆も佛の智慧はどんなものかといふことは知ること出来ぬ。

これは言ひ換へれば、知らうと思つても知れないものである。知るといふこと、信ずるといふこと、がスツカリ一つになつて初めて知れるのであつて、「自分はこれだけの智慧がある」「自分はこれだけの修行が出来た」といつて、自分の智慧だの、自分の分別だの、自分の修行だのといふもので、それで佛様のことがわかるだらうナンと言つてもわかりはしない。佛といふものは非常に偉いものである。それ故に、知るといふ心持と、佛様を絶対に信ずるといふ心持とが融けて一つになつたその人のみわかる。他の者は逆も佛の境界はわからない。斯ういふのであります。

於恒河沙劫 咸皆共思量 不能知佛智
「新發意の菩薩」は、新に菩薩の行を實行する決心をした者、それが數限り無い佛様にお仕へ申して、いろ／＼な「義趣」——佛のお説きになりましたその教の中味の深い意味が一通りわかつて、又わかつた事を人に説く、自分は一通りわかつたからといつて、他の者の爲に説いてやる。その人の數が「稻麻竹葦の如く」これも澤山といふこと、それが十方の世界に充滿するほどあつても、さういふ人間が一生懸命に「妙智」非常に勝れた智慧を以て、恒河の沙の數ほどの永い年月の間いろ／＼考へて見ても、逆も佛の智慧を知ること出来ぬ。

不退の諸の菩薩

一心に共に思求すとも 亦復た知ること能はじ
其の數恒沙の如くにして
亦復不能知

この處は誤解してはならない、知る力がつまらないものだとはいつて居ない、知る力だけではわからぬ、知る力の上に信ずるといふ力が加はつて、知るといふことは飽迄も深く進んで行く、信ずるといふことは固く信じて行く、その信ずる力と知る力が融け合つて一つになつたときに、はじめて「佛の境界」といふものはこれだナ」といふことがわかつて行くのであります。その意味を涅槃經の中に次のやうに説かれて居ります。

「信有つて解無ければ無明を増長し、解有つて信無ければ邪見を増長す。信解圓通して方に行ひの本と爲る。」
信ずるといふ方があつても、それを理解する、譯がわかるといふことが無くて、たゞ無茶苦茶に信じて居るならば、無明を増長するといつて、信ずることは結局迷ひを増長する本になる。世間の俗の言葉で「罎の頭も信心から」といふやうなのはそれです、

鬪の頭などを拜んだつて仕様がな。何でも信心したら宜いと言ふけれども、何を信じて行くのか、どうして信じて行くのか、信する道筋がわからないで、たゞ信するといふことばかりやつて居れば、だんだん迷つて行くだけの話である。信するといふ夢を見て居るので、實際の世の中とまるで離れてしまふ。それではいかぬ。と言つてまた解有つて信無ければ、理窟がわかつたからと言つて、わかる〜といふことばかり言つて居つて、自分より上の佛様を信するといふことが無ければ邪見を増長する。これは今の學問をして居る者にはさういふ者がある、邪見といふのは理窟を自分に都合の好いやうに曲げてしまふ。だから理窟のわかつて居る者ほど仕末が悪い、何とか、かんどか捏ねつけて自分に都合の好いやうにやつてしまふ。これは信するといふ力が無いからである。自分を本にして自分達の周囲の事だけを考へて、人間以上の佛を信するといふことが無い。さう

なると邪見を増長する、邪といふ人間を中心にするところの間違つた考が起つて来る。それだから信解圓通すると言つて、信する力と解する力が一つになつて行く。「方」にその時初めて、それが行ひの本となつて来るのである。この圓通といふ言葉は非常に面白い言葉でありまして、圓といふことは揃ふこと、通といふことはその揃つたものが一つになることです。揃つたゞけではいけない、揃つたものが別々になつて居る場合が多い。よく世間では揃つて居れば宜いと言ふけれども、揃つて居つても別々になつて居つては仕様がな。「あの子供は両親が揃つてるから幸福だ」と言ふけれども、揃つて居る両親が始終喧嘩をして居れば、子供は少しも幸福ではない。揃つたものが一つにならなければ揃つた効果が無い。「信解圓通」とありまして、信と解とが兩方揃つて、それが融け合つて一つになつたその時に初めて行ひの本になるので、人間の行ひはそこから立つのである。

それだから、その事を此處では言はれるので、菩薩の行を積んで、信力が堅固で、佛の教を堅く信じて行くといふ、所謂智慧もあれば信する力も強い者だけは特別で、それだけは佛の事がわかつて行く、他の者は一通り今まで修行したからといつても、それだけではわからないといふのであります。

又舍利弗に告ぐ 無漏不思議の
甚深微妙の法を 我今已に具へ得たり
唯だ我のみ是の相を知れり
十方の佛も亦然なり

(又告舍利弗一 無漏不思議 甚深微妙法 我今已具得 唯我知是相 十方佛亦然)

「無漏」は迷ひの無くなつた清らかな心持、それから出た不思議な甚深微妙、洵に奥深いところの法といふものを、自分は已に皆具へて居る。たゞ佛のみ(お釋迦様は佛でありますから)その事がわかる。

十方の佛も亦わかるのである。これは前にも申したやうに、お經といふものは全體を讀まなければならぬといふことがわかる。ズツト後の方に行つて、十方の世界が通じて一つになる。現世に於てお釋迦様のお説きになつた事も、十方の世界の佛のお説きになつた事も一つであつて、要するに深い意味は二つは無いぞといふことが、ズツト先に行つてハッキリ言はれるのであります。さう言はれる準備はこの邊から出来て居る。お前達にはわかるまいが、自分にはわかるぞと言つて、自分ばかりではない、十方の世界の佛が皆自分と同じだ。だから佛に二いろは無のである。佛の覺つた所は絶対の眞理であるのだ。尤も佛の説かれる説き方は、それは時に依つて違ふだらう、又佛が世の中に出現して衆をお教ひになるその救ひ方は時に依つて違ふだらうけれども、佛様の心の中心で覺つた所は一つの事である。絶対の事が二種ありはしない。二つあれば絶対ではない。そこ

で自分ばかりではないぞ、十方の世界の有ゆる佛様も自分と同じである。

舍利弗當に知るべし 諸佛は語異なること無し
佛の諸説の法に於て 當に大信力を生ずべし
世尊は法久しうして後 要す當に眞實を説き
たまふべし

(舍利弗當に知る 諸佛語無異 於佛所説法 當生大信力 世尊法久後 要當説眞實)

そこで更に繰返して、「舍利弗よ、諸佛は語異なること無し」これは善い言葉でありませう。實は言葉は異ふでせう、お釋迦様の言ふこと、大日如來の言ふこと、阿彌陀様の言ふこと、異ふ。お前達はいろいろの佛様の言ふことが皆言葉が異ふと思ふだらうが、實際は言葉は異ひはしないのだ。高く低く言はれる所は異ふけれども、その中に含まれた意味は異ひはしない。斯ういふことであります。お前達は異ふやうに思ふだらうけれども、それは本當ではない。

買つて来る。さういふ料簡でいろいろな物を探して成べく良いのを探し出して、それでもまだ信じない、モット良いのがあるはしないかと思つて居る。それだからいつ迄経つても、自分の信心といふものはものになりはしない、少し亂暴な事を言ふやうですけれども實を言ふとさうです。自分が能くわからないくせに、「佛の教よりモット善いものがあるだらう、これはなにしろ三千年も昔のものだ、今の時代は時代が異ふ、モット善いものがあるはしないか」斯ういふやうに思ひまして、一つの教が尊いと思ひながら、その尊い教に心の力、身の力を打込んで信するといふ氣分になりにくい。マアいゝ加減に「有難いけれども、まだモット他に善いものがあるはしないか」斯ういふ料簡で居る。だからものにならない。いつ迄経つてもフラついて居るだけであつて、腹の底までズットしみ透つてわかるといふことは出来ない。それではいかぬと言はれる。佛様といふものは

幾ら異つた言葉を言つて見ても、その言葉の中に含まれる意味合といふものは少しも異ひはしない。本當の覺りといふもの、本當の道といふものは一いゝしかない。

それだから「佛の所説の法に於て當に大信力を生ずべし」佛が教を説いたら、その教を説いたことに對して本當に絶對に信じて、モウこれは永久に變らないものだと思つて信じなければいけないぞと言はれる。これは凡夫である吾々には、鐵の棒で頭を敲られたやうなことであります、私共はどうも疑ひが深くていけない。だから佛教を讀むと「これは成程尤もだ、けれどもモット善いものがあるはしないか」と思ふ。自分がよくわからないのは欄に上げてしまつて、斯う思ふ。買物に行つたやうなつもりで「夏羽織を拵へるのだから一番良い物を見せて呉れ」と言ふ、「これが一番宜しいのです」「モット良いのはないか」「これが最上です」と言はれて漸く安心して

どれ程物を言つても、佛様の説くことは同じだ。言葉は異ふだらうけれども、内容の意味は同じだ。だからお釋迦様といふ一人の佛のお説きになつた意味と、十方の世界の萬億の佛の説く事も同じことである。又佛様の教を今聽いて信すれば、千萬年後に至つても少しも變らない教である。だから佛の教に對して大信力を生じて、間違ひない事だと信じて、心を打込んでこの教を護るやうにしなければならぬと言はれて居る。

「世尊は法久しうして後」佛様は初めは世の中に出て方便の教を説いて、聽く人の力相當な教を説かれるから、久しいこと教を説いて居らつしやる、その後には必ず眞實の教、佛様御自身がお覺りになつた事をその儘にお説きになるに違ひない。だから佛を信じて一心に佛の教を確り聽いて居れば宜しい。佛の教を能く味へば、必ず久しい後には眞實の教を説くのである。

諸の聲聞衆 及び緣覺衆を求むるものに告ぐ
 我苦縛を脱し 涅槃を逮得せしめたることは
 佛方便力を以て 示すに三乗の教を以てす
 衆生の處處の著 之を引いて出づることを得
 せしめんとなり

(告諸聲聞衆 及求緣覺衆 我令脱苦縛 逮得涅槃者 佛以方便力 示以三乗教 衆生處處著 引之令得出)

聲聞緣覺といふのは前に繰返して言つたやうに、世の中の無常を觀じて世間に執はれないやうな心持の出來上つた人々、さういふ者に告げられるには、「我は苦縛を脱して涅槃を逮得せしむ」自分は今まで小乗の低い方の教を説いて、お前達の苦惱の束縛を脱せしめ、さうして涅槃を得せしめた「涅槃」は此處では本當の意味の涅槃ではない、一身の苦を滅し、一身の煩悶を脱し得たゞけの事を此處では涅槃と申します。苦しみを除いて、心の迷ひ、心の悩みを脱

名古屋を通つたのも宜かつた、彼處を通らなければ此處に來られなかつたといふことがわかる。所が京都へ行く切符を持つて居りながら京都へ行かないで静岡や名古屋で降りて、それの切りそこに止まつて居る人には、横濱を通つても、静岡を通つても意味は無い。目的の所に行かないでお終ひですから……。だから吾々は、自分が佛様の心持を自分の心持として修行を積んで行きますと、その時初めて佛の低い教にも高い意味が入つて居つたナ、深い意味が籠つて居つたナといふことに氣附くのであります。それで佛敎の敎典などを讀んでつまらないといふ人があるのは、深入りしないからつまらない。深入りして見ると、つまらないやうに見えたものが皆價値を有つて來る。それを言ふのであります。低い方の教を守つて覺つた者に今更めて言ふが、お前達の一身の苦勞を除いたり、一身の煩悶を除くことを敎へたのは、それを本にして本當の覺りに入らさうといふつ

せしめたのであるが、それは一應の覺りを手懸りとして、更に深い方に入らせようといふつもりで説いたのである。だからこれから自分の言ふことを確りと考へると言はれる。この「小乗の教を依いものだと思へ」といふことは、大乘の教に依つて佛の境界に到達させようといふ目的を附けて後の話であります。その目的の附かない者が、無暗に小乗の教はつまらないといふ譯には行かない。見當が違ふ。本當に自分が修行して見ますと、つまらないものも皆價値が出て來る。本當に修行する心持の無い人には、つまらない物の價値といふものはわからない、東京から汽車に乗つて京都へ行く、京都へ行つて見ると、途中通つて來た各の驛が皆役に立つたといふことに氣附くでせう、横濱も通らなければ京都へ行けない。静岡も、名古屋も、美濃の大垣も通らなければいけない。京都へ行つて見るとわかる。横濱を通つたのは有難かつた、静岡を通つたのも宜かつた、

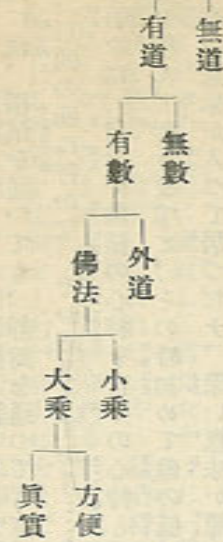
もりであつたのだ、そこを一つ考へて見ろ、本當の覺りに入れば、今まで通つて來た一つ一つの低い修行も、皆價値を有つて來るのだと言はれる。

兎角私共は深い教を深く味はないで、淺く表面だけ考へて、さうしてつまらないと言つて軽く見てしまふ癖がある。殊に現代はその癖が酷い、これは餘程考へなければならぬ事でありませう。つまらないと言ふ人は、結局は自分がつまらない人ナンです。昔の川柳に

「つまらぬと言ふは小さな智慧囊」

とあります、それは本當の事です。自分の智慧囊が小さいから詰らないのだ、智慧囊を大きくすれば何でも皆詰つてしまふといふ。自分の智慧囊の小さい事を忘れてしまつて、つまらないといつては仕様がなない。佛の敎でもだん／＼自分の修行が進むに従つて、苟且に言はれたことでも深い意味を有つて來る。

そこで佛が方便力を以て、示すに三乗の教を以てす。三乗は聲聞、緣覺、菩薩と、低い教からだんだん高い教に行くが、その三乗の教を以てするのは、衆生の處々の執著を引いて出づることを得せしめんが爲である。人間といふものは執著がある。處々の執著といふのはどういふ執著であるかといふと、解り易く示して見れば、次のやうないろ／＼な執著をおこす場合がある。



法華經を信する者の側から、一切の人間を假に見るならば、斯ういふ風に段を成して居る、人間の中で、一番初めに、道の有る者と道の無い者が對立して居る。道の無いといふのは、眼と同じやうな生き方

それに対して、道のある中に教の有る者もある。人間は斯うすべきものだといふ教を受けた者は、それはその道を守る中でも氣の利いた方です。それからその教の有る者の中で、若し教を別ければ外道——佛法以外の教と、佛法と別れる。さうして佛法の方向が意味が深い。人生の本當の意味に立脚して居るか、この方が宜い。その佛法の中に於て、小乗と言つて一身の苦勞を除くといふやうな教と、それから大乘と言つて、自分をも人をも救ふといふ教とある。その大乘の中に於て、方便の教もあれば、佛の心持をスツカリ打明けられた眞實の教もある。斯ういふことになる。大體斯ういふ筋道に考へれば間違ひない。二つづつ相對した右の方をやめて、左の方に附いて行けば宜しいといふ譯である。

それで對手を見る時に、どの段で見るかといふことを考へなければならぬ。若し相手がまるで眼のやうな人間ならば「道の無いのはいけない、人間の道

をして居る者です。親子も他人もありはしない、ただ自分の事さへ善ければ宜い……といふ人間があるでせう、それは道の無い者です。それに對して、道の有る者がある、例へば親に對しては優しくしなければならぬ、女房、子供には慈愛をかけなければならぬ、他人に對しては親切にしなければならぬ……といふ、人間の一通りの道を辨へた者がある。これが先づ對立して居る。道の無い者といふのは極く野蠻人で、眼のやうなものでせう。それからその道のあるといふ中に於て、教の無い者と、教の有る者が對立して居る。教といふものは無くても、たゞ習慣で相當に道を守つて居る者がある、それでも道の無い者よりはよろしい譯です。ナニも別に教ナンといふものは知らないけれども、子供の時から、人に會つたらお辭儀をしろといつて習つたから、何とはなしにお辭儀をして居る……といふやうな風に、習慣で人間の道を多少やつて居る、けれども教は無い。

を守れ」斯ういふことから教へて行かなければならぬ。道を守る中に於て、教などはわからないで、たゞ習慣的にやつて居る人間ならば、「それは危いから、教を習つて、本當に自分のやつて居ることの意味を知るやうに」と教へて行く。教を受けて居る中に、佛法以外のものをやつて居る人があるならば、「それはいかぬ、佛法の方が上手だ」と教へて行く。斯ういふやうに、いつでも右を捨て、左に移るといふ風にやつて行かなければならぬでせう。自分自身に就てもさうですが、世の中の人を教へ導く場合にもさうです。その段が違ふとまるで話がわからない、これはよほど考へなければいけない事です。法華經が非常に尊い教であるといふことは、吾々は信じて居りますけれども、しかしこれをまるで道も教もわからない者に向つて「法華經は阿彌陀經より上だ」と言つても、法華經も阿彌陀經もありはしない。それでは仕様がなし。日蓮宗を信する人が時々それを

やつて困る。往來で辻説法などをやつて居るのを見て居りますと、盛にそれをやつて居る。『四十餘年未顯眞實だ、法華經でなければいけない』と言ふけれども、聽いて居る人は四十餘年も何もわからないで聽いて居る。それは對手が異ふのだから、この順序で行かなければならぬ。向ふが何處に居るか、向ふが右の方に居れば左の方に移るやうに、どの所に居るかといふことを能く辨へて居ないと、幾ら奨めても何にもならない。さうしてだん／＼に難詰もして行つて、結局は佛が眞實の心を打明けられた教に入つて行くことになれば、これはマア申分がない譯であります。

そこで『處々の著』といふのは、斯様な筋道の處々に執著して居る。若し道の無い獸のやうな生活に執著して居れば、そこから引張り出して道を求めさせる。若し教の無い、習慣的の道德に執著して居れば、そこから引張り出して教を求めさせる。若

を發せる比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷有り、各是の念を作さく。

(爾時大衆中、有諸聲聞、漏盡阿羅漢、阿若憍陳如等、千二百人及發聲聞、辟支佛心。比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷各作是念。)

その時に大衆の中にいろ／＼な聲聞、『漏盡』といふのは迷ひの無くなつた阿羅漢、阿若憍陳如といふやうな千二百人の者、又聲聞だの、辟支佛のやうな心持を發すといふのは、世の中の無常を觀じて、世間に執はれないやうな清らかな生活をしたいといふ望みを發したところの比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷。出家の男女、在家の男女、さういふものが大勢居つたが、それが皆不思議に思つた。

今者世尊、何が故ぞ、慇懃に方便を稱歎して是の言を作したまふ。佛の得たまへる所の法は甚深にして解り難く、言説したまふ所あるは意趣知り難し。一切の聲聞辟支佛の及ぶこと能はず

し佛法以外の所に執著して居れば、それより佛が善いと言つて引張つて行く。右の方に執著して居る者を左の方に引張つて行く。處々の著といつていろいろの所に執著して、『俺はこれで澤山だ』と言つて腰を卸して居る者を、『モット行け、モット行け』と言つて、少しづつ先の方へ引張つて行く。さうして結局は佛様の眞實信じて居らつしやる通りに、皆を信するやうにしてやらう。一切衆生悉く佛性が有るのだから、皆佛に成れる。結局は佛と同じものにしてやらう、斯ういふつもりで教を説く。その用意の深いことは、なか／＼普通の人間が推量しても推量の出来ないことであるから、たゞ佛様のやうな心持を有つて、又佛様を信することの深い人間のみがわかつて行くだらう。斯ういふことを言はれたのであります。

爾の時に大衆の中に諸の聲聞、漏盡の阿羅漢、阿若憍陳如等の千二百人、及び聲聞辟支佛の心

る所なり。佛、一解説の義を説きたまひしかば、我等亦此の法を得て涅槃に到れり。而るに今是の義の所趣を知らずと。

(今者世尊。何故慇懃、稱歎方便。而作是言。佛所得法、甚深難解。有所言説。意趣難知。一切聲聞、辟支佛、所不能及。佛説一解説義、我等亦得此法。到於涅槃。而今不知。是義所趣。)

今日は一體佛様はどういふ譯で、あんなに慇懃に繰返し／＼して、佛の方便を讀めて居らつしやるのだらう。佛様が大勢の人間を教へ導く、その教へ導き方が大變だといふことを、佛様が頻りに言つて居らつしやるが、不思議だ。さうして又斯う言つて居らつしやる、佛の得たまへる法は甚だ意味深くして、普通の者にわかりにくい。それから佛が言葉で以て人にお説きになる時に、どういふお積りでそんな言葉をお使ひになるのか、そのお使ひになつた趣意なども、どうも普通の人間にはわからない。一切の

聲聞、辟支佛にはわからないのだと説いて居らつしやるが、今までの様子と違ふぢやないか、斯う思つた。

今までの様子と違ふといふのは、今までは佛様は、世の中の無常を觀じる、世間に執はれない心持を作れといふことを説いて居らつしやる。それだから自分達はその佛の教に依つて修行して、世間に執はれないだけの氣分になつて居る。所が今日聴くといふと、そんなものは駄目だ、佛の智慧といふものはそんな者にわからないぞと言はれるから、何だか譯がわからなくなつた。斯う言ふのであります。併しこれはどうも教の順序だから仕様がなない。例へば「これから早稲田の方に行くにはどう行きませうか」と聽かれた時に、詳しく言つたつてわかりはしない。斯う右に曲つて、左に曲つてなどと言つてもなかなかわかりはしない。だから「その所を眞直に行らつしやい」斯う言つて、さうして後から附いて行つ

言ふのに、眞直に行つてもわからないと思つて、オド／＼して行かない者は、てんで初めから仕様がな

い。
この間も言つたやうに、どうしても人間は他の人を教ふといふことが根本です。その教ふといふ所謂能施の心持は、能捨の心持が起つて來なければ起るものではない。初めから施すことが出来るものではない。捨てるといふことの出来ない人が、施すといふことの出来るものではない。それだから小乗の教といふものは、斯ういふ意味に於て大變價値を有つて來る。捨てられる人でなければ施せる人ではない。捨てる反對は貪る、施しの反對は惜むといふことで、だから普通の凡夫は貪りと、惜む貪惜ばかりやつて居る。欲しい／＼惜しい／＼でそれで終ひです。私共が十四五の時に「人生は欲しい惜しいで五十年」といふことを聴いたのですが、これはどうも本當です。その時にはなんでもない事を言ふと思つて、

てやる。眞直に行つて曲り角へ來たら「オイ、モウ一つ右へ曲れ」と言つてやる。それで初めて目指す所に行ける。佛様はそれです。先の先まで言つても

わからないから、先づ「眞直に行け」と言ふ。眞直に行つて曲り角へ來たら、今度は「それぢやいけな

い曲れ」と言ふ。それを行く者が慌てしまつて、眞直に行けと言ふから、何でも眞直に行けば宜いと思つて、無我夢中で眞直に行くといふと、人の家の奥座敷へ足駄を履いて飛込むやうなことになる。眞直に行けといふのは、眞直に行かして置いて、それから曲らせる爲に、先づ眞直に行けと言つた。小乗の教と大乘の教はそれでありませう。兎に角世の中に執はれない心持を作れ。先以て自分が執はれない心持を作つて置かなければ、人を教ひ、世を教ふことは出来ない。それを執はれない心持になつたら後はどうでもかまはないと言ふならば、それは優て者である。けれども又その途中で眞直に行けと

大して氣にも留めなかつたが、佛し變なことだから今でも覺えて居る。成程吾々の一生涯は欲しい惜しいで五十年です。欲しいナ、惜しいナでいつの間にか五十になつて頭が禿げてしまふ。どうも欲しいから捨てられない、惜しいから施せない。そこで能く捨てることゝ、能く施すことゝは伴つて來る。

人間の欲しいといふ根性は實にひどいもので、私

は新宿の通りを歩いて始終さう思ふのですが、活動寫眞のピラを路で撒いて居ります。あれは貰つても直ぐ捨てしまふけれども、前の人に呉れて自分に呉れないとチョット氣持が悪い。何の役にも立たないものでも、人にやつて自分に呉れないと氣持が悪いといふやうな、さういふ小さい心持を有つて居る。その反對を言ふと「君だけは特別だ」といふことを非常に喜ぶ。これはつまり貪る心持がある、だから何でも特別だといふことは非常に好きである。活動寫眞へ行つて見ると、特等席といふのがある、特等

と言ふから一人か二人かと思ふと、一パイ腰掛けて居る、別に特等でもなんでもない。けれども特等といふ名前が好きなのです。だから「あなただけ特別に……」と言はれると大變喜ぶ、その心持が捨てられなければ施すといふことの出来よう譯はない。

それだから「處々の著之を引いて出づることを得せしめん」と前にあつたやうに、だん／＼執著して居るから少しづつ、出離れて、結局、佛様のやうに一切衆生の爲といふ所まで來させようといふのです。併しそれがわからない。だから茲で不思議を起した。今までは世の中の無常を觀するといふこと位で宜いと仰しやつたのに、今日伺へば、そんなことではない、佛の智慧になるまでには容易ではないぞと言つて居らつしやる。どうもわからない。斯う言つて疑ひを起して居つた。

爾の時に舍利弗、四衆の心の疑を知り、自らも亦未だ了らずして、佛に白して言さく。

のは誰にもわからないと言つて、繰返して仰しやるが、それはどういふ譯でありませうか。自分は昔からこの來、佛様のお弟子になつていろ／＼な事を習つて居つたけれども、今まで佛様がこんな風に、佛以外のものはつまらないといふことを仰しやつたことを聞いたことがない。そこで今御覽の通り四衆——比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷の人々が皆疑ひがあつてわからなくなつて居ります。唯だ願くば世尊、この御趣意を敷演して、モット詳しく説明をして吾に聽かして貰ひたい、佛様は何故に懇懃に、繰返し／＼してその甚深難解の法、普通の者にわからぬ事を佛ばかり覺つて居らつしやるといふ、その佛お入れになるのでありませうかと言つてお尋ね申上げた。

茲がチョット面白いのは、舍利弗は智慧第一と言はれて居ります。智慧第一の舍利弗であるが故に、

(爾時舍利弗。知四衆心疑。自亦未了。而白佛言)

その時に舍利弗が、大勢の人間の心に疑ひがあることを知つて、又自分でも、佛様の今日仰しやる事が十分にわかりませぬから、そこで佛に申上げるには世尊、何の因、何の縁ありてか、懇懃に諸佛の第一の方便、甚深微妙難解の法を稱歎したまふ。我昔より來、未だ曾て佛に従ひて是の如き説を聞きたてまつらず、今者四衆咸く皆疑有り、唯だ願はくば世尊斯の事を敷演したまへ。世尊何が故ぞ懇懃に甚深微妙難解の法を稱歎したまふ世尊。何因何縁、懇懃稱歎、諸佛第一方便、甚深微妙、難解之法。我自昔來、未曾從佛聞。如是説。今者四衆咸皆有疑。唯願世尊。敷演斯事。世尊何故、懇懃稱歎、甚深微妙、難解之法)

佛様よ、何の因、何の縁があつて、今日は非常に叮嚀に繰返し／＼して、佛様の第一の方便、甚深微妙難解の法を稱歎されるのでありますか。佛様がその法の深い意味をお説きになる、その御趣意といふも

一切の人に黙ひやりがあつたので、結局懇懃第一になつた。衆が困つて居る、けれども衆は何とも言はないでオゾ／＼して居つたでせう。併し舍利弗は智慧第一であつて、非常に智慧が勝れて居りますから、衆の心持が能くわかる。だから衆に代つてお釋迦様に説明をお願い申上げた。お釋迦様も、舍利弗があまり叮嚀に繰返してお願ひするから、到頭黙つて居られないで説かれた。その説かれた事がこれから後の經典となつて來るのでありますから、智慧第一の舍利弗が、結局最も大きな慈悲を實行したことになる譯であります。

智慧と言つても、たゞ今の世間で言ふ智慧といふものとは違ひます。少し亂暴な言ひ方をするやうですが、悪者といふものは要するに馬鹿です。本當に智慧があるならば悪い事はしない。人間の意味が本當にわかり、人生の意味が本當にわかり、天地萬有の意味が本當にわかれば、悪い事をしると言つても

出来るものではない。だから悪者といふものは要するに馬鹿です。智慧が勝れて居れば必ず慈悲の行が出来て、一切の人を救ふといふことになるに違ひない。だから悪者は憎むべきものではない、憐れむべきものだといふ説もそこから出て来る。それで佛教に於て智慧を磨くといふことは、智慧が必ず慈悲の行を伴ふからであります。本當に人間の意味がわかつて、人を救はずに居られる苦のものではない。智慧第一の舍利弗が衆に代つてお釋迦様に質問して、それからお釋迦様の廣大な説法が出て来たといふことは、これは實に面白い。吾々は智慧が足らないから、どうも人の爲に何にもならない譯であります。爾の時に舍利弗、重ねて此の義を宣べんと欲して偈を説きて言さく。

(爾時舍利弗。欲重宣此義。而説偈言)

そこで舍利弗が重ねて偈を以てこの事をお尋ねしたのであります。

我が意測るべきこと難し 亦能く問ふ者無し
問ふこと無けれども而も自ら説きて

所行の道を稱歎したまふ

(道場所得法 無能發問者 我意難測 亦無能問者 無問而自説 稱歎所行道)

さうして又「道場所得の法」と言つて、佛陀伽耶に於て釋尊がお覺りになつたその内容といふものは、誰もそれに對して見當も附けられない、それに對して問を發す者も無い有様である。なんだか知らんが、今佛様が、佛は偉いぞといふことを仰しやるのを聽いて、ボンヤリして居ります。自分達の心持が推し量ることが出来ないで、問ふ者も無くボンヤリして居ります。然るに、伺ふ者が無いのに佛様は自分で盛にお説きになつて、「所行の道、」佛様の自分で行はれた所を讃めて居らつしやる。

チョット此の所を淺はかな凡夫の立場から説明したいと思ひますが、己れを誇るといふことは無論卑

慧日大聖尊

自ら是の如き
禪定解脱等の

久しくして乃し是の法を説き
たまふ
力無畏三昧
不可思議の法を得たりと説き
たまふ

(慧日大聖尊 久乃説是法 自説得如是 力無畏三昧 禪定解脱等 不可思議法)

慧日大聖尊、智慧の光が日の光の如くに一切を照して居るところの佛様は、今まで四十餘年の久しい間説法して居らつしやつて、それから後、今日はじめて是の法を説きたまふ、今伺つたやうな珍しい事を仰しやつた。自ら佛様の説きたまふ所に依ると、今佛が自分で具へて居るところの力、無所畏、三昧、禪定、解脱といふやうな、そんな不思議な、普通の人間が考へても考へられないやうなものを、佛様は具へて居らつしやる。

道場所得の法は

能く問を發す者無し

しいことです。併ながら謙遜するといふことは最上の道徳ではなくして、中位の道徳でありませう。本當に覺り切つた人であるならば、自分が覺つたと共に、他の覺らない者が氣の毒で仕様がなから、遠慮することは要らない譯です。「自分は知つて居るぞ、だからお前達知らない者に教へてやる」斯ういふのが當然です。自分は知つて居つても知らないといふ謙遜は、洵にそれは奥床しいものですけれども、併しそれは最上のもではない。本當に一切の人を憐れむ心持があつたら、謙遜などして居る暇は無い。自分がわかかつて居るのに衆がわからなければ氣の毒で堪らない、だからなんと思はれてもかまはない、思切つて自分の信する所を有體に打明けて説かれるでありませう。その所は三段に見なければいかぬと思ひます。自分に誇つて居るのは一番下で、謙遜して居るのはそれより結構だが、中位の所で、一番上の方に行つたら誇るでもなければ謙遜するでもな

い、たゞ慈悲の心持を以て一切に對せられるのであり、たゞ慈悲の心持を以て一切に對せられるのでありますから、自分の思ふ所をその通り説かれるのでありませう。

例へば日蓮聖人の如きでも、随分一方から言へば無遠慮だといふ批評が出来る。自分が一番善い事を知つて居るのだ、日本に於て第一に正直なのは俺だといふやうなことを言ふのは、餘所から言ふと「もうもチト變だ、あんなに威張らなくても宜ささうなものだ、第一に正直だナンと言はずに、正直な者の一人だぐらゐに言つて置いたら宜ささうなものだ」と思ふけれども、併し自分が本當に深く道を信じて信しない總ての者を氣の毒だと思ふ心持が出たならば、自分の思ふ通りを打明けて皆をその道に入れるといふこと、それが本當の慈悲心でありませう。さうなれば誇るとか謙遜するといふことを超越して、モウ一段高い心の持ち方になつて居るに相違ない。唯にその事は大事であります。吾々がお客様を養ふ

一切の人間を我が子と思つて居られるから、少しも遠慮しない譯です。吾々が經典を讀んで見ると、いつでもその所にヒョット頭く、「なんだか言ひ過ぎはしないかな」と思ふことがある。それは佛様が吾々を子供として見て、丁度親が子供に對して「このお刺身は美味いからお上り」と言ふやうな心持でいつでも吾々に臨んで居らつしやるからであります。それであるから佛の言葉は能くその意を酌まなければいけない。

それからモウ一つは、例へばそこに鹽焼とお刺身とあつて、鹽焼も相當な味がするけれども、お刺身の方がモット美味いといふ時には、お刺身を子供に食べさせて「鹽焼は美味くないよ」と言ふけれどもそれは美味くない譯ではない、大根の尻尾よりはズツト美味いけれども、お刺身に比べれば美味くないからだからそれよりモット美味しい物を食べさせようといふ慈悲心から「鹽焼は美味くないよ」と言ふで

時には、美味しい物を出しても不味いと言ふ「何もありませんが……」と言ふ。それはお客様だから、お客様に向つては「このお汁が美味いだらう、この鹽焼が美味いだらう」といふことは言はない。西洋人は言ひます、ピフテキを御馳走すると「このピフテキは美味からう」と言ふ。けれども日本ではそれをやらない、「洵に不加減でございますが……」と言つて出す。併し子供に向つてはさう言はない。子供に向つて「このお刺身は不味いけれども……」とは言はない、子供に向つては「そつちのお魚よりこつちの方が美味いからこれをお食べ」と言ふ、親が子供に對する時には謙遜はしない。これは本當の親子だから、眞實思ふ通りの事を言ふのである。だから若し親の子に對する心持になつたら謙遜は無用である。それだから佛様は無所畏と言ふ、少しも憚る所が無い。佛様の教はいつでも無所畏で、思ふ通りを言はれる。少しも繕はない、又遠慮はない、本當に

せう。それを佛で聽いて居る者が、「どうもあのお母さんは嘘をつく、あの鹽焼は相當美味いのに、何故不味いと言ふだらう……」それはその心持がわからないからである。そこで佛が善惡を別ける時には、いつでもそれを言はれて居ります。縦ひそのものが善い教であつても、それより更に勝れたものに比べる時には、その教は悪い教だと言ふ、悪い教だといふのは、更に善きものに進ませようといふ慈悲心から言ふのである。相當な善人を捉へて、お釋迦様は「惡人だ」と言ふそれはモット善くなれといふ心持から、かなり善い事をして居る者を捉へて惡人と言はれる。その佛様の仰しやる善惡といふ言葉は「出来るだけ完全な者になれ」といふお考から、いつでも、足らないものを惡として教へられるのであります。經典を讀む者は、その點をよく注意しなければならぬ、惡人と

場合でもやはりさうです、例へば日蓮聖人が、鎌倉の良觀といふ坊さんを悪人だと言はれた、けれどもその良觀といふ坊さんは、今で謂ふ慈善事業などをやつて、孤兒を救つたり、病人に薬をやつたりいろいろして居つた。今の世の中に出て居れば立派な善人です。けれども日蓮聖人はそれを悪人だと言ふ。それは良觀が絶対に悪いとは思はないが、佛の教を奉ずる者としてモット善い事をすべきである、モット善い事をすべき人間が、力を惜んでいゝ加減に眠つて居るからどうも怪しからんといふことから、悪といふ言葉を使つて居られるのであります。だから悪人と言はれる位なら結構です、悪人とも言はれないやうになつたらお終ひです。佛様が若し今出て来て吾々に向つて「貴様は悪人だ」と言つて下さつたら洵に有難いですが、吾々はまるでコンマ以下で、悪人とも善人とも言はれないで、餘所を向いて通られるかも知れない。佛様に悪人と言はれる位の者は偉

いものです。兎に角意味があるから言はれる。いつでも佛様の慈悲は、吾々を完全にしよう、佛様御自身と變らないものにしてやらうといふことに注がれて居るから、縦ひ吾々がいゝ加減善い事をして、それは悪いとしてお小言を仰しやる。さうして更に善い方に向けられるのであります。この慈悲の廣大な事を忘れてはならないのであります。そこで所行の道を譏歎されて、お前達のわからぬ所である、斯う仰しやるのは、決して佛様が衆を斥けて、衆を突き除けて、自分だけ勝れた者にならうといふお心持ではなくして、衆の程度の低いのを憐れまれて、モット勝れたものにしてやらうといふお心持から、先以て佛自身の道を稱歎されるのであります。

(第十九講了)

全國遊説の記 (一)

河合 陟 明

佛教復興の氣運を誘致したるものは、一はラヂオによる聖典講義であるが、他は昨夏東京及び京都等に於て開かれたる汎太平洋佛教青年會大會であつた佛教史上の豪華版たりしこの大會の主權國に於ける全日本佛教青年會聯盟はかの國際會議がオリソピックと同じく四年目に一度なるに對し、毎年一回國內大會を開く事と定められ、今年はその第五回總會が金澤に於て開催せられたのである。予はこの大會に再び統一團代表として出席し、佛教の大義名分をつさげて聊か孤軍奮闘したると同時に、之を機會として多年宿望たりし全國遊説の旅に上らんと、まづ北陸、東海道、近畿、山陽、山陰等各地を巡りて、或は大學高等専門學校及び師範乃至小學校等に佛教を講じ日蓮主義を談じ、或は國防の第一線に立つ軍

人諸氏を訪うて剛健仁慈の我が信仰を鼓吹し、或は同門の信徒及び一般市民に接して微妙柔軟の法を説き、或は有恩の人を尋ねて報恩の微衷を陳べ、或は知友同志の士を語らうて信仰の法味を頌ち、或は後輩の學徒を尋ねて且つ慰め且つ勵まし、時を利しては天下の名勝歴史の故蹟を探り、或は楠公及兒島高德等勳皇の義人の忠戦奮闘の跡を巡り、或は同門の先覺の巡錫説法の地に感じ、將又恩師本多日生上人の誕生得度勉學の地を訪るゝ等、感慨をぞろ窮まり無く、四月末より六月半ばまで五旬の旅の間、無限の意味を掬し來つて今日こゝに僅かにその一端を記してみようと思ふのである。

四月二十五日

この日子は本團理事長上田辰卯氏を多忙匆卒の間に

訪うて事の由を告げ、直ちに帝大佛教青年會館に開かれたる東部佛教青年會聯盟の會議に列した。元來全日本佛教青年會聯盟(之を全聯と略稱す、又佛教青年會を佛青と略稱す)なるものは、東部、東北、關西、特に京都、廣島、或は北陸、九州等々其他各地方の佛青聯盟の綜合體であるが、その本部として中樞的機能をも爲すものはおのづから東部佛青聯盟の士が之に當つてゐるのである。予も亦全聯の指導部委員として、かねてより全日本佛教青年會聯盟指導原理要綱草案なるものを作製し來り、その指導原理に就ては、根本信條、倫理信條、社會信條の三種を分ち、以て現代佛教青年子女の佛教に關する根本信念を樹立したる上、自行(倫理的)と化他(社會的)との兩面に亘り我等の佛教的意識を整束せんことを努めたのである。特に根本信條に就ては、佛教の行法として觀念系と信仰系(法行と信行)との統一として信智合一を論じ、之を意志化して實踐活動に入らしむる意味に於て信念第一主義を採り、進んでこの信念の對象を三寶に定め、而て三寶の解釋に就ては、甲論乙駁種々の見解あり得べく又ありしことではあるが、予等は一宗一派の見地を超越して、佛寶

とは大聖釋尊なりと確定し、その本質内容に就ては佛身觀發展の思想史を顧慮しつゝ、それらを綜合して特に現代に適切なる文化的解釋を試み、近世西歐の哲學及び神學的思想をも聊か批判の對象としたのである。予は過ぐる三月病褥にあつて是等の執筆及び會議に惡戦苦闘し、今漸くその大體の成果を收めて之を全聯本部の指導部會議に繋ぎ、根本信條のみならず倫理及び社會信條をも共に纏めて列席の諸賢と相議し、更に金澤に於ける諸種の準備をも整へたのである。(指導原理の要綱に就ては、茲には遺憾ながら割愛せなければならぬ。)

會議の後予は立正大學教授濱田本悠氏と更に詳細に指導原理の内容を審議し、急ぎ歸宅して旅裝を整へ上野驛を發つたのは夜八時五十分であつた。同車には全聯理事長大村桂巖氏、理事鷹谷、常光氏等、主事稻葉氏、書記松浦氏等が乗合せてゐた、予は挨拶を済まして寢に就いた。汽車は一路北越の地を指して闇の夜を突き進む。予は味爽目覺めた、窓外に目を移せばまさか「青海」「親不知」のあたり日

本海の荒波が今朝は割合に和かに濱邊に打寄せて居り、空には曙の女神が五色の雲を漂はせて、岩角の間から金色の陽光がまさかに出でんとしてゐる。予は思はず美觀に恍惚とし遙か越路の彼方に十年相見えざる心の友の居ることを思ひ、この渺茫たる海の濤の續く所にその友の呼吸し居るを思うて、何よりも先づ直ちに訪れたき心地がしたが、今日の豫定の既に定めある事を考へて心惜しくも身を車に委ね續けた、予は此日まづ海の魅力に囚へられた。海の魅力は予にとつてはこの度の長き旅に於ける一の大なる精神的意味であつた。

四月二十六日

かくて朝六時四十七分富山に着く。予は大村氏等始め本部委員と別れて先づこゝに下車し、師範學校を訪ねた。早朝のことにて未だ教職員も餘り來てゐない。暫く待つて校長鈴木正明氏と會見した。氏は東大哲學科出身である。予は拙著「皇道と日蓮主義」を進呈し、次第に皇道と宗教より佛教或は日蓮主義を論じゆく中、兩者各々強硬の意見を主張して下らざるものがあつたが、氏は皇道を以て絶對的宗教の

如く見んとする、予は皇道に固より宗教的内容を見るのではあるが、完全なる本來的意味の宗教とは見做し得ない事を論ず。氏の言に云く、「釋尊を以て絶對人格と見做すならば、何故に天照大神、天皇を以て絶對人格と見做し得ないか」と。予は人類の文化或は歴史の又は其に對する人格の意義等より進んで實在の超歴史性に就て種々解明したが、氏は猶釋然たらざるものがある。氏も中々皇道信念の強固な人と見えその點は頼もしい。當に教育勸語を奉戴して進むのみだ。こは大いに可なりであるが、然し人間の思索的要求といふものは、更に大いに自己自身の内に省て人類普遍の哲學的宗教的なる無限の扉を打開き其處に叡智の欲求を満たし實在の至理を把握して久遠の生命の自覺に達せんことを欲するのではなからうか。予等は會談三時間互ひに啓發する所あり、再會を約して別れた。皇祖天照大神と佛祖釋迦牟尼如來との人格的絶對性の問題は、確かに吾人の慎重なる思索的論議の好題目たるものである。予は此日鈴木校長に答へたる予の解明を此處に記すよりもむしろ讀者諸君子の眞摯なる研鑽を勞はさん

と思ふものである。讀者諸子女にして本誌上にその解釋或は解決を寄稿せらるゝならば我等は喜んで之を掲載するであらう、敢て讀者の勉學研鑽と發表の勇氣を乞ふ。

續いて直ちに車を驅つて驛に至り、電車を待つ間にやつと晝飯——名物の鱈すしを大急ぎでやつけた。食ひ終へるか終へない中に丸呑にしながら車に乗つて、富山高等學校を訪ねた。折悪しく校長は不在であり、教頭成田秀三氏に刺を通じて佛敎を語り拙著を呈す。先の比較的若き校長の或風貌に對してこの老教頭は一癖ありげに見えてしかも濃厚なる好紳士である。人間といふものは歳をとると鍊れるものだといふ風に思ふ。校長不在の爲講話の都合に至らざりしは残念であつたが、成田教頭は懇切に次回に之をお願ひ致し度いとの言葉であつた。

續いて急ぎ汽車に搭じ、高岡に着き、高商を訪ねた。校長鈴木弼氏と會談、やはり濃厚の老校長である、拙著を呈して話しゆく中、暫くして生徒主事柏倉俊三教授も來られた、氏は帝大英文學出身である。校長は佛敎やキリスト敎等の精神的研究が盛に

が紹介をお頼みしたるに對し、同校長は誠に快く承諾せられて、同校の日蓮聖人鑽仰會々長たる吉松武通教授の手を経て、予の行かんと欲したる大學高等專門學校に、予の希望したる如き日蓮聖人鑽仰會設立促進、乃至佛敎精神普及の目的に關して、實に懇篤なる過分の讃辭を以てしたる紹介並びに推薦の手紙を寄せられ居たる事であつた。この紹介狀が如何程有効なりしかは實に想像の外である、予は行く學校毎に其を痛感し、而て伊藤校長の御厚恩を心中に深謝したる事であつた。因縁空しからず、予が最初に講話したる所も福島と同じく高岡の高商であつた。凡そ三時間餘り話し終へるや夕方であつたが、鈴木校長の御厚意で、學生諸君に案内せられて車を驅つて高岡の名勝を尋ねた。福島高商といひ、富山高校といひ、高岡高商といひ、皆市外俗塵を離れた處にあるのは、學窓そのもの、社會に對する一種精神的權威といふ點より考へて予は好ましく感ずる。

古來いふ「居は志を移す」と。山水秀麗の地が英豪雄偉非常の者を産するは偶然でない。而て學窓に學ぶ純潔なる若き青年學徒は、男女何れにせよそこ

なる事は望む所であるとして、この校長と主事との盡力で直ちに佛敎青年會の會員を呼び集められた、時に既に稍遅く、一二年は歸つてゐたが三年の諸君にして、佛敎青年會の委員たる渡邊憲二君、高松良三君等々數名の學徒に、極めてゆつたりと寛ぎながら、固くならず理窟張らずに人生の種々相より宗教へ話を進め佛敎を語り、井上眞君より「先生が日蓮聖人の信仰を最上とせらるゝ學的根據はどこにあるのですか」といふ質問より法華經に基ける日蓮敎學を種々に陳べ、天台の組織的佛敎觀を略述し、華嚴の敎學をも引照しつつ、平易に三時間程話した、時々キリスト敎をも論じた、話の半ばより鈴木校長も列席された。實に愉快であつた、學生諸君とは一見舊知の如く親んだ、實に純潔なる學生諸君と會談するのは愉快に絶えぬ。今度の遊説中、予は種々の學校で話したが、最初に話したのがこの高岡高商であり、而も最も愉快なるもの一つであつた。

而してこゝに特記せねばならぬのは、予が此度の遊説に際しては、かねて兩三年來親しみ來れる統一團最初の地方布敎たる福島高商の伊藤仁吉校長に予に高きブライドを有たねばならぬ。予も亦既に、多年希望し居たりし如く、京大の「西田哲學」なる門下にこの精神的矜持を有つて、その學派の一種高遠なる雰囲気は育まれつゝ、ひたすら偉大なる眞理を思索し冥想し來つたのであつた。而て予が信仰に復活したのも亦實にこの學窓に學べる時であつた。……一度び學窓を卒へて實社會に出づるや「生」の具體的現實に於て縱横無盡に眞に實際的なる鍛鍊修養し發明工夫をせなければならぬのではあるが、然し予は終生かの學園に培はれし高き精神のブライドを棄てざらんことを欲する。然り棄てざらんことを努めよう。人類頭腦と心情との最高の連鎖を踏破し來りし哲學及び宗教の世界に於て、尙止むこと無き高き眞理恩慕の道を辿りつゝ、しかも世の後輩の青年學徒と手を握り、否ハムマー持つ民衆の泥手を握つて社會のドン底にまで救濟の慈手を降さねばならぬのである。それが哲人にして宗教家の役目である。一面より見れば、學校を出た所で、まだ一實際の世の中は、更に一〇〇大いなる力が十重二十重に交錯し貫流して居り、この「嫌」と言つても飛び込まねば

ならぬ力の渦巻の中に飛込んで捲まれ、て各々獨自の運命を荷ひ負ひつゝした、か痛い目に會はされなければ、まだ一人前として見て呉れず、又見ようと思つても見られぬまいが、然しかゝる力の世の中にあつても、かの誇り高き精神の權威をどうして予は棄てる事が出来やう……。「上に菩提を求め下に衆生を化す」上には高き佛陀大覺の眞智を求め下には惱苦の人世に温かなる救済の慈手を延ばす……それが菩薩——大道心者の精神ではないか、誓願ではないか。「一切智願猶在りて失はず」また「失はざらしめん」が爲に、自己にも衆生にもその佛性を開發せんが爲に、常に我々は上下兩方向に——佛陀と民衆との兩面に——手を指し延べねばならぬのである。

高岡高商の附近は、かの福島高商の信夫山公園の如く、亦やはり一小丘陵の公園を成してゐる。その風光は實に好い。日本一大きい城を築かうとしたが徳川に睨まれてやめたといふ昔の城址であるが、深き堀池があり、樹木生ひ茂り、櫻や紅葉の時は殊に良いさうであるが、予はむしろ俗氣少き夕まぐれに

ちつとく王室の式微——朝廷の御憤懣に申すも畏き極みなりし。然も天海僧正の如きに至りては我が神洲の聖主 一天萬乗の大君を、事もあらうに「山城天皇」と稱せしめ奉らうなどと考へ幕府に献策せしに至つては言語道斷不届至極！ 義公光圀の出づる。豈實に徒爾ならんや！ 而も幕府が此くの如く上朝廷にも下諸藩の大名にも、あらゆる策略術數を以て抑壓牽制し最も巧妙なる封建政治を敷きたりしにも拘らず、次第々々に勤王精神澎湃し來り、遂に明治維新王政復古、皇威八洲に輝くに至りしを考へみる時、眞に我大日本皇國は如何なる英雄豪傑にも治められず、如何なる壓力をも反撥彈劾する、たゞ天皇の御稜威にのみ伏しまつろぐ、たゞ大君の御稜威を奉じてのみ國家が存續發展する——一個特殊の神聖國なる事を痛感せざるを得ない、大日本の大は、皇祖肇國の大道たる「天業經綸 恢弘養正 四海一家 八紘一宇」てふ、その精神的意味に於て全世界を包んで猶餘りありといふ意味に於ての「大日本」たる事を國民は銘記せねばならぬ。而て今日祖國の治者被治者の關係を見よ、政治經濟文武の實際

新緑の青々たるを見ながら池中に影を寫し見た。神社もあり境内も廣い。次で郊外の繁久寺なる前田利長公の墓所に至つた。どてつもない大きい墓石である。案内の學生高橋君や市井君等の説明によれば、公は利家公の孫とかで甚だ英才の士であつたのを徳川家康に煙たがられ、故あつて病と稱して登城せざりし時、駿府の家康は、「もう今頃は死んでゐるであらう、之を墓石にせよ」とて、この途方もない大石を前田家に與へた、公は之を運搬するのに七尾港より陸揚げして、此處高岡まで道にすつと竹べらを敷きつめ、その上を轉がしてやつと運んだ、その爲に莫大なる費用を要した、加賀百萬石の前田家一門の財政を困窮ならしめようとしてこの大石を與へたのであるといふ。この大石が幾つとなく運ばれ、立派に墓が出来上るや利長公はその前に於て憤然として自刃し果てたといふ。あゝ狸爺家康の奴老巧奸策至らざるなし。歸つて思へ、かの徳川が自ら八百萬石を擁しながら、朝廷には儘かに十萬石の費用を献せしのみ、どうして朝廷がこの微量で御皇室御自ら始め公卿朝臣を養はるゝ事ができやう。長年う

を見よ、國家改造の潮は序々に——押寄せ來つてゐる……。

その昔前田利長公が如何なる氣持で自及せられし事であつたらうか、又その遺族の心中は如何ばかりであつたらうなどと考へながら、予は厚くその菩提を弔はんとしばし黙禱を捧げた。この時既に夜の幕は殆ど下りてゐたが、尙進んで車を急がして、前田家の菩提寺なる瑞龍寺に至つた。往いて見るやさすがに名勝の名に耻ぢすその建築の藝術的なること、予はうたゝ感嘆しつゝ飽かず眺め入つた。國寶といふがさもある。予は名古屋の明倫中學に學んだ頃、日蓮主義の燃ゆるが如き熱烈なる信仰に入りしと同時に、故あつて美術建築に深い興味を感じ、その頃聊か調べた事であるが、それ以來かゝる方面にも絶えず心は向けてゐるのである……今この堂宇の前に立つ時、「建築は凍れる音楽」といふ感をひしゝと受ける。予は深く此の言葉を愛す、純粹感情の波動たる音楽のリズムやメロデーが、その流動を凝固せしめた時はまさにこのやうな形象をとるのであらうか……。堂宇の背景も奥深くして、特に夕間

迫れる中であつたから一層の神秘味を感じた、寺僧を尋ねて閉せる門を開けてもらひ、中庭に入つて更にその美を賞した、堂内の彫像も國寶と聞く、見たいが時間がないので残念ながら後日を期した。再び車を驅り途々感嘆しながら學生諸君と話し、後日再び此地に來つて諸君と相見を講話し、又これらの名勝を尋ねんことを約し、ブラットホームまで見送られて七時四十一分こゝを發つて八時五十二分漸く金澤に着いた。此日一日にかねて豫定の如く三枝を尋ね、前夜來車中睡眠不足のかなり疲勞せる所を頑張つて奮闘したる甲斐空しからず、遂に三度目に目的を達して講話を爲し、而も名勝故蹟を探り、自然と人工の美を味ひ得、又學生諸君と十年の友の如く、かのかねて知りなじめる福島高商の鐵仰會員の如くに相親しみ得たるは實に愉快絶頂であつた。予はこの旅行の最初の日にあちこちで種々なる感じを受けしたが特にこの快感を感じたる事は眞に喜ばしきことであつた。奮闘的人生まゝに是の如くなるべし……：「夕は一日を讚美し、死は一生を讚美す」……金澤驛に着くや、全聯金澤委員の叮嚀なる案内を

受けて驛近き中川旅館に投じた、予の室は奥の靜かなる處である。學生と話しつづけて辨當買ふ間もなかつたが、やつこの旅宿で十時頃晚餐を採つた。隣りなる金澤ホテルの大村全聯理事長等に挨拶を済ませ、一日の活動を回顧しながら入浴して寢に就いた。明日はいよいよ奮闘すべき大會の當日であるのである。(續)



本部 教 報

大講演と映畫會 六月二十二日第四土曜日の午後七時より、知法思國會主催の屋内布教講演と映畫會を本部講堂に開催された。日蓮宗提供の活動寫眞、殊に大日蓮五千尺が呼物となつて定期前より早くも会場整理に忙殺せる有様で、寺尾、松岡幹事や、堀本主事、並に上田愛弘氏等大童となつて進陣されて居たお姿は申しやうもない有難い事で後光がさしてゐるやうに思はれた。

先づ寺尾主任幹事は、子供達の爲めに一場の童話を試み、それより「此の一戦」なる映畫で小國民は歡悅に滿されてゐた。やがて磯部主任幹事は「國へ法ニ依リテ昌フ」なる題下に、法の内容を説き、國民として各其人格の向上は教に依つが如く、國家に於ても教法の意嚴なるを力説し、教なき國家は滅ぶるならんを論じ、三教融合の聖徳、日蓮精神を基準に、進んで日蓮聖人の勳王に及ぼし、佛教信仰の大切なる點を説き、父兄並に指導階級の三省を求め、轉輪聖王の護法の大事を説ける經文を以て結び大拍手裡に降壇し、續い

て本門宗阿部宗務總監は實生活に即せる信仰の必要を強調し、非常時の打開は全く日蓮主義ならざる可からざることを懇説された。いかにこれが聽衆の胸臆に印象したかは其の場采の響で窺はれる。終つて最後に、日蓮聖人の御生誕より龍口法難迄の寫映に於て、解説の巧なる某人離れして、滿堂の大家、窓外の無量の衆、皆極めて靜肅に禮を正しうして其の深い感銘を胸に収められたことを仄聞し法悦に滿された。十時半、本郷宮次郎氏の閉會と萬歳和唱に惜しい暮は閉ちた。當日本門法華宗三浦精翁師、本妙法華宗釋眞實師等のお顔も拜されて嬉しかつた。

法華經講座 例月の通り毎木曜日晚七時より小林一郎先生によつて續講されてゐる。目下薬王品である。日曜日集會 左記の通り午後二時より四時半迄本部の階上で修まれた。五月廿六日 法要及講話 體驗を語る 本郷 泰巖師 法華經讚唱 山口 智光師 七月二日 同 前 磯部 滿事氏 信仰と感應

日蓮主義の信仰 小西 日華師 同日 談話會 堀本 顯正師 磯部 滿事氏

同 十六日 法要と講演 立正安國論略講 中村 清一氏 法華經讚唱 山口 智光師 同 二十三日 同 前 末法の大導師 和賀 義見師

横濱 教 誌

五月中の當地の盛しは、次の如くであつた 五日 夜、神奈川の高部氏方にて、「子は寶」磯部先生。 九日 夜、磯子の高橋氏方にて、和賀氏は寶の御法話。 十一日 夜、中區千歲町の青柳氏方にて、 十二日 夜、神奈川區鶴屋町の京田氏方にて、 十五日 夜、中區宮崎町石毛氏方にて、小西師、磯部先生の御法話。

十七日 會員大内氏の御子さんが、いたいた盛りの二歳にして、おしくも世をさられた。昨晩お通夜、本日は禊部先生始め、有志の方により、大内氏方に於て、午後一時から告別式後、大同で茶毘に附された。尙、此の午後續いて、荏下町の齊田氏方に於て法宴が催された、「求法と静思」のお話。

二十五日 夜、禊部先生御出席。小西師、禊部先生御出席。

二十七日 夜、神奈川三ツ澤の齋藤氏方に於て。小西師御來話。

五月三十一日 午後三時より禊部先生を迎へて高商の例會。「信」について御法話あり

同 晚七時 中村様方にて支那例會。禊部先生の法華經七對治の續講あつて奥深く、岩淵先生は楠公の信仰について述べられ、十時四十分和氣露々裡に散會す。

六月十三日 夜、中村様方にて定期座談會六時半定期には、早や十數名の熱心なる高商

福島支報部

生がつめかけて居た。中山氏より協同組合運動について話があり、會員の募集を待ちて阿氏より「人生苦より解脱の道へ」について話られ、次で岩淵氏より「佛教に於ける本尊觀の歸趨」について有益なる御話があり、後各自意見を交換して十時半散會。二十數名出席熱心なる會員が舞會増えるのは法國のため喜ばしい事と思ふ。

二本松報

五月十四日 貧困救濟事業二本松佛教不樂會托鉢修行。

同 十五日 夜、於蓮華寺題目講修行。

同 十九日 午後一時五十七分當扉通過にて難死遺骨二基故郷に歸る、因つて出迎禮經す。

同 卅一日 免因保護事業、安達佛教慈善會春季托鉢修行。

豫告

本部に於て左記の通り相營み可申候

孟蘭盆會供養

七月十五日(月)午後七時

法要卜講演

御誘合せ御參詣被下度候

財團統一團

寄附金維持及開費誌料領收

(自五月二十一日至六月二十日)

| | | | | | |
|----------|------------|----------|------------|---|--------------|
| 一金貳圓五拾錢也 | 久留米 平岡 越郎殿 | 一金貳圓五拾錢也 | 東京 須賀純之助殿 | 一金參圓也 | 静岡 竹内 さん殿 |
| 一金五圓也 | 札幌 林 啓太郎殿 | 一金貳圓也 | 同 沼部彌太郎殿 | 一金五圓也 | 東京 山田 英二殿 |
| 一金六拾錢也 | 大阪 山乃神傳道閣殿 | 一金貳圓五拾錢也 | 同 高田直三郎殿 | 一金壹圓貳拾錢也 | 同 櫻井惣右衛門殿 |
| 一金拾圓也 | 東京 笠岡 信語殿 | 一金貳圓五拾錢也 | 同 宇野 博順殿 | 一金貳圓五拾錢也 | 横濱 鈴木 二郎殿 |
| 一金貳圓五拾錢也 | 神戸 倉藤喜一郎殿 | 一金貳圓貳拾錢也 | 奈良縣 笠目 善春殿 | 一金五圓也 | 東京 桐生 大澤 いし殿 |
| 一金貳圓五拾錢也 | 山形縣 村川源次郎殿 | 一金壹圓貳拾錢也 | 東京 柏木 吾市殿 | 一金貳圓貳拾錢也 | 東京 土屋 喜久殿 |
| 一金貳圓五拾錢也 | 福島 三澤 沖江殿 | 一金壹圓貳拾錢也 | 同 目黒駒太郎殿 | 一金貳圓貳拾錢也 | 水戸 前刀 寶清殿 |
| 一金五圓也 | 東京 高木信三郎殿 | 一金參圓也 | 同 能勢 綱武殿 | 右難有入帳仕候也 | |
| 一金貳圓五拾錢也 | 名古屋 牛田 共保殿 | 一金貳圓貳拾錢也 | 宮城縣 八木 左一殿 | 財團法人 統一團會計 | |
| 一金壹圓也 | 東京 唱行 會殿 | 一金壹圓貳拾錢也 | 静岡縣 小澤 眞樹殿 | 念 告 | |
| 一金拾圓也 | 兵庫縣 榎井 つた殿 | 一金貳拾圓也 | 東京 井上道太郎殿 | 本誌の紙數増加と共に製本にも郵送にも經濟膨脹ですから、誌料は前金にお願致します。 | |
| 一金貳圓五拾錢也 | 東京 森岡 三重殿 | 一金參圓九拾錢也 | 同 柴田 武治殿 | 正團員の團費は誌料と混同せぬやう年額金貳圓五拾錢ですから乍恐縮滞りなきやう御拂込願します。 | |
| 一金貳圓五拾錢也 | 横濱 貝塚敏二殿殿 | 一金貳圓貳拾錢也 | 廣島縣 村上 信夫殿 | 財團 統一團 | |
| 一金參圓也 | 千葉縣 平山 三藏殿 | 一金壹圓貳拾錢也 | 静岡縣 八木 東興殿 | | |
| 一金貳圓四拾錢也 | 大阪 鷺田 重政殿 | 一金貳圓貳拾錢也 | 甲府 甲府支部殿 | | |
| 一金壹圓也 | 岡山縣 有田 寛英殿 | 一金七拾貳錢也 | 紀州 乾 涼市殿 | | |
| 一金壹圓也 | 横濱 日下部二葉殿 | 一金貳圓貳拾錢也 | 大阪 山乃神傳道閣殿 | | |
| 一金貳圓貳拾錢也 | 東京 越山雄四郎殿 | 一金貳圓貳拾錢也 | 東京 佐野 中志殿 | | |
| 一金貳圓貳拾錢也 | 神戸 前木 月子殿 | 一金貳圓五拾錢也 | 横濱 伊藤 喜造殿 | | |



次 目

| | |
|-------------------|-------|
| 本尊意識に就て…………… | 聖應院日生 |
| 日蓮教學講座(第十九回)…………… | 河合陟明 |
| 法華經講話(第二十講)…………… | 小林一郎 |
| 記事 | |

○本部團報各地教信

號月八年十四第

